七勇士戦記

あゝ神縄

<180>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

イカダ

脱出計画に失敗

海岸一帯に地雷

ゴウのなかに、まだ日本兵が九人いた。彼等は、海上を突破して国頭へ行くことを決めたといい、毎夜、九人で海岸へ行き丸太でイカダをつくっていた。

ある日、彼等の代表が、本大伍長らに別れのあいさつにきた。

『いよいよ今夜、俺たちはイカダで海上の敵船のなかを突破し、国頭へ行くことになった。君たちとは、これでお別れだが、いずれ国頭か本土で再会しよう』

九人は元気よくでていった。

〈俺たちも、早く敵陣を突破して、国頭へ行こう〉

伍長は、彼等をうらやましく思いながら眠りについた。

あけがたである。血だらけの負傷兵がひとり、はってゴウへはいってきた。

『どうしたッ？』

見れば、昨夜出発した九人のうちのひとりだ。

『やられた……』

彼の話によれば、九人は、砂浜へかくしてあるイカダをとり出しにいったが地雷が爆発し八人は戦死した―という。

『敵は、われわれがイカダを作っているのを、まえから知っていて、地雷を敷設したんだ』

負傷兵は残念そうにいう。

〈かわいそうに、助かるためのイカダつくりが命とりになるなんて皮肉なことだ…〉

伍長が八人の死を悲しんでいるとき、数人の敵兵がゴウの入り口からはいってきた。六人は負傷兵がひとり、はってゴウへはいってきた。

『ヤマッ！』

奥から友軍の声。これに『カワ』と答えて近よった。三十人ほどの将兵がいた。なかに五人の女子挺身隊員もいた。伍長は友軍の死体のなかをカンテラをさげてさがした。中将（氏名不明）の目撃したところがあり、手首や肉片が散乱していたが、将校のコウリを見つけた。ふたをあけた。将校の軍服

書屋武のここに日本海軍の補給があったーと大木常雄さんがいっていた。

ボロの軍服と着かえた。十円札がたくさんでてきた。手にとってはみたが、タバコにしてもうの近くにまとまった。しかし、

敵の小銃で精密につくられた近代兵器にたいし、四、五百年むかしの兵器・日本刀をふりかざして突撃するものの気持ちがわかるような気がした。

その日本刀は、大隊上等兵がもつーというので借した。仲間の兵隊たちも、ズボンやシャツをとりかえ装束をととのえて集合した。どんなことがあっても、この五人は、はなればなれになら亀ことー本大伍長の命令。

そこへ、女子挺身隊員五人がやってきた。

『兵隊さん、お願いです。私たちもいっしょにつれていってください』

五人だけでも突破がむずかしいのに、このうえさらに人数がふえるのは危険だった。心を鬼にして、泣きすがる女性たちをふりきり、伍長らはゴウをあとにした。

（写真 山第三四七五部隊下風一郎軍長の母ハルさん（名古屋市・撮影）

このゴウも安全ではないことを悟った。若干中に国頭脱出をきめ、五人は軍装や身のまわり品をととのえることにした。

敵の小銃で精密につくられた近代兵器にたいし、四、五百年むかしの長い刀身に魔がはってある。ギラギラ無気味な光りをはなち、握っているうちに、自分でもおどろくほど精神が緊張してくる。

日本刀が一本あった。一ぱくらいの長い刀身に魔がはってある。ギラギラ無気味な光りをはなち、握っているうちに、自分でもおどろくほど精神が緊張してくる。

七師団戦記

あゝ沖縄

戦没一万八十五柱の雲にささぐ

<181>

安楽部隊か…

必死に物質を運ぶ

いまはすべて前線

山三四八三部隊（輸重兵第二十四連隊・長・中村卯之助大佐）第二大隊（自動車大隊・長・服部憲吉少佐＝四国出身）第四中隊（長・鈴木宗中尉＝柏崎出身）の戦闘参謀政敏少尉（桂広出西二期二十九）の手記によってつづる。

機さんは十八年十一月一日、学徒出陣の大学卒業者三千数人と旭川第九部隊に入隊した。

十九日、満州第二七〇部隊に転属。部隊たびたびの幹部候補生として、東京の機甲整備学校に分遣になり、十九年八月、軍曹になった。このとき、原隊が満州から南方に移動し、十一月に帰隊した。

十九年十二月末卒業と同時に見習士官任命。原隊が沖縄に行ったことを知らされ、原隊に集結。第十一期見習士官約七百人は各部隊に配属のうえ、飛行機の護衛で沖縄に向かう。

一月十五日、熊本の部隊到着。師団長田崎中将から訓示の酒をいただき、山三四八三部隊鈴木中隊に着任。この第四中隊は、橋見習士官が初年兵として入隊したところであり鈴木中尉は幹部候補生時代の教官だった。

第一小隊長村中博少尉（札幌出身、北大卒）第二小隊長橋見習士官、第三小隊長山田少尉（利尻礼文出身）。

当時中隊は八重瀬岳に陣地があった。部隊本部は嘉手納にあった。その後二月上旬、部隊本部は八重瀬岳のふもとの宮城に移動。その周囲四、五万に各中隊、輜重隊は、宮城部隊へ物資を輸送する。全車両無灯火、行進隊でと布陣、陣地構築をはじめた。同時に、嘉手納方面からの他部隊の弾薬、糧秣輸送をやっていた。

三月二十三日から猛爆がつづき、四月一日、米軍沖に数百隻の艦船がおしよせた。

中隊は夜、島尻地区の一部時間もかかった。

東風平方面から前線部隊に物資を輸送し、かえりは負傷者をはこんできた。

四月二十六、七日ごろ、山兵団は首里前線に出動した。

輜重隊は一番らくな部隊だ。後方にいて輸送が任務、生命の危険はないからなあ…」という。知らないにもほどがあるーとはばらがたつ。

すでに前線も後方もない。米軍は、組織的に沖縄攻撃用の綿密な航空地図をつくりあげ、夜間しかも車輌からでも正確に射撃できるように制定してあった。

輜重部隊の行動する道路は、完全に敵火網のなかにはいっている。とくに交差点、十字路は数十秒おきに砲弾が落下する。行くときなかった穴が、帰途には五、六十もあいている。一回の往復で直撃をうける車両が四台にもなった。

一晩じゅうねむらないで、朝がた帰ってきたトラックは、その日のうちに整備される。パンクしたタイヤには、全部、手おしの空気いれがいれ、その夜、ふたたび出動する。これが、連日連夜くりかえされた。

配給になる食糧は、日一日と乏しくなり、飯ゴウの中にたいつぱいの日がつづく。みんなクタクタに疲れていた。

輜重隊は、米軍が、沖縄攻撃用の綿密な航空地図をつくりあげ、夜間しかも車輌からでも正確に射撃できるように制定してあった。

輜重部隊の行動する道路は、完全に敵火網のなかにはいっている。とくに交差点、十字路は数十秒おきに砲弾が落下する。行くときなかった穴が、帰途には五、六十もあいている。一回の往復で直撃をうける車両が四台にもなった。

一晩じゅうねむらないで、朝がた帰ってきたトラックは、その日のうちに整備される。パンクしたタイヤには、全部、手おしの空気いれがいれ、その夜、ふたたび出動する。これが、連日連夜くりかえされた。

配給になる食糧は、日一日と乏しくなり、飯ゴウの中にたいつぱいの日がつづく。みんなクタクタに疲れていた。

一部隊長の母ハルさん（札幌市・軍似

いまでは人がよりつけなくなっている八重瀬岳のふもと

七師団戦記

あゝ沖縄

<182>

戦没二万八十五柱の霊にささぐ

きれいにヒゲそる

あたった死の予感

ふたりの軍曹

橋少尉はつくづく思う。

（トラックという大きなものをもっているため、よその部隊より目がとけいかかる。これが敵の下の力時を、ぬったたい、つらい任務だ。ひたすら輸送に万全を期すことだけが生きがいなんだ）

第二分隊長の小泉 長治軍曹（旧姓山田）は少尉の戦死直後、第三師団参謀部補生で、師団部隊補生孔雀隊 似出 ゆだった。

五月中旬のその日山田軍曹は少尉をさそって橋少尉のところへきた。

【今夜、なんぐが死ぬような気がするので、ヒゲもそった し、ふんどしもとりかえた。これから首里前線へ弾薬の輸送のために行く】

【気をつけて行けよ】

少尉に見送られた山田軍曹は、南風原の城の十字路で、敵機の襲撃をうけて予定どおり戦死した。

翌日、少尉は死体収容にでかけた。中学時代五カ年間、初年兵時代もいっしょで、少尉が若任したとき第二分隊長だった山田兵治―

（山田、いんねんというやつだ。安らかにねむれ、俺がねんごろに葬ってやるぞ…）

少尉は山田軍曹の遺体を八重瀬岳のふもとに埋葬した。学生時代からのことを思い出し、泣けて泣けてしかたがなかった。

× × × ×

五月三日の総攻撃に、第四中隊は糸満陣地へ行き十五りゅう弾薬をトラックにつみ、南風原北方まで行くよう命令をうけた。

橋少隊は金城四に砲五門と弾薬をつみ、そのうえさらに四ずい型爆雷を持って行ったが、首里前線につくと、敵弾がはげしく、とても目的地にはつけそうもない。待機していると、伝令が来た。

【攻撃は失敗したから、すぐ後退せよ】

命令のまま、朝がた七時ごろ、グラマンに迫われながらS陣地へ帰った。

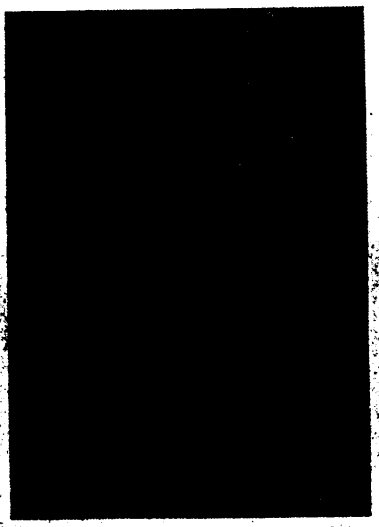
五月中旬、橋少隊はゆ馬大隊長大橋少佐の指揮をうけ、弁ケ岳方面に出動。

五月二十日ごろ、大橋大隊長米軍第一中隊長発見の報告は歌人の長男は、少尉にとって最初なものであった。

軍司は少尉初年兵時代の恩師であるという。

橋のまちをおとずれ、師団軍曹の奥さんをさがした。

まじめだった師団兵長のみたましかからの祈りをささげ、宋と人と思い出はなしをしたかった。だが、奥さんにはあえず、いまに、その消息は不明である。



八重瀬岳のふもとで。カメラをかまえる宮平義氏といつくする中村佐郎氏

【ごとも自分は死ぬ】

【ごとも自分は死ぬ】

【ごとも自分は死ぬ】

十勇士戦記
あゝ沖縄
<183>

戦没一万八千五百柱の霊にささぐ

高級食
ビール、生きた羊
軍司令部へ運べ……とは

栖小尉らの自動車部隊は、首里前線からの負傷者輸送をはじめた。毎夜、どろにうまりながら数百人の負傷者をトラックにのせ、後方の野戦病院へはこぶ。

野戦病院とも言い、入り口からあふれ、野天に、サトウキビをかけておいてある。

〈戦争とは、こんなにも悲惨、残酷なものか…〉

栖少尉は"地獄"神の不幸を目の前に見る思いがした。そのうちに、けが多い生

は死ねーとう命令を受けした。すべし〉

〈これでいいんだろうか…〉

居間の輸送は、全員の死をま

栖少尉は、居間輸送に従事

百人、千九日、栖小隊は宜野

戦闘作戦に出動していた。朝、

八重瀬岳の中隊陣地に帰隊した

少尉は、また命令をうけた。

〈栖小隊は、居間輸送に従事

心の底に沙のようなものが残

ねくたけた。少尉は、そのむね

を申し入れた。

〈捕虜を覚悟のうえで敢行す

べし〉

ふたたび命令である。捕虜は

最小限にくいとめねばならな

い。そ、トラック間を百五十メ

らいあけて進ぜした。

第一分隊長川上軍曹が自殺し

たほか十数人の戦死者がでる。一

そのひとり立花上等兵は、手す

から爆風となり、のち戦死した。

生き残った少尉は、部下の戦

死に涙く涙をたれた。一

× ×

六月七日、栖小隊は八重瀬岳

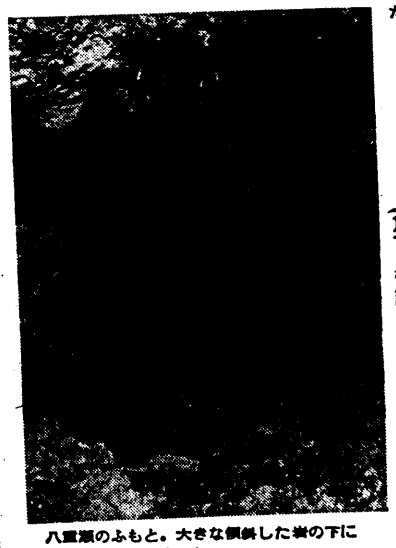
にあ令があった。

〈命令とはいえ、こんなに犠

牲者をだし、まことに申しわけ

ない。勇敢であった戦友諸士の

めい福を祈る〉



八重瀬のふもと。大きな傾斜した岩の下に小さなわき水があつた

の陣地を奪取。真栄原地区に移

転した。

神原重長(第十軍司)は少尉の

初年兵時代の新付き(その内容

〈全軍司令部(参謀その他の幹

部をはじめとする〉

軍司令部へ運べ

軍は、八重瀬岳の南方四キロ

せまっている。荒涼しきり。そ

のなかをくぐり、八重瀬岳すも

との野戦病院へ戦死の覚悟で走

った。

輸送官は、パインアップル

のかんづめ、ビール、生きてい

る羊など、トラックに積み込まれ

ないほどある。少尉はぎょうい

た。

〈栖が沖縄へきて、一度も見

たことのないものばかりだ〉

ムラムラとて、涙がたってきた。

〈戦死の覚悟できてみれば、

これは、われわれに犠牲をはら

わせてでも、軍司令部は、高級

食をくいたいのか〉

（連載　山岸二四七五部隊下風一郎軍曹の妻ハルさん（札幌市・記）

あゝ神縄

戦没一万八千五柱の霊にささぐ

ハインかん

腹いっぱい食べる

あすは今生の別れか……

〈トレッ！そっちが、その気なら、こっちにも考えがあるぞ〉

軍少尉は、積み込み作業にあたる通信手、助手の兵隊たちにパインアップルのかん詰めをたべることを命じた。

「腹いっぱい食え、遠慮するな。俺が責任者だ！」

兵隊たちは、銃剣でかんを切りひらき、手づかみでたべはじめた。

〈今生の思い出に、腹いっぱい、思う存分たべてくれ…〉

うまそうにたべつづける部下の姿を見ているうちに少尉のほほを、涙がとめどなく流れおちた。

「小隊長殿、うまいです。いっしょにたべてください」

「俺も食うから、さあ、おまえたち、うんと食え、腹いっぱいたべろ」

〈ああ…このパインを一車両部隊長はじめ、戦友たちに持っていって、たとえ一口でもいいから食わせたいなあ…〉

兵隊たちは、四つも五つもたべつづける。ひとりで八個のかんをたいらげ、まんぞくげに白い歯をみせて笑っている顔もある。

〈トレッ！やるぞ！〉

少尉は決心した。ここを担当している准尉の前へ行った。

「准尉、俺たちが命がけでやってみれば、このざまだ…」

准尉は不動の姿勢。少尉は一歩大またに近よりこんな高級食を食っていたな」

「おまえたちは、毎日ここで石のように硬くなる准尉！

少尉は大声をはりあげた。

「軍司令部は任務終了後、一車両分、パイかんを受領する。渡すことを准尉に命ずる」

少尉は、輸送を終えてのかえり、パイかんを一車分持ちかえった。森部隊長への報告は

「無事任務を遂成、ただいま帰隊いたしました。軍司令部はわれわれが最後の輸送をしたおれにと、一車両分のパイかんを分配してくれましたので、受領してまいりました」

部隊長以下全員、何カ月ぶりかで口にするパイかんに大ちょこびだ。そのひときれを口にしながら、軍少尉は

〈ああ、あと二、三日のいのち。このうれしそうな、みんなの顔も、これで見おさめか…〉

涙とともにゴクリとのみくだした。

× ×

この日を最後に、全車両からバッテリーをとりはずして焼きはらった。バッテリーでゴウ内に電気をともす。あかるいゴウ内でみんな、生きかえったように元気になる。

〈いよいよ、あすからは、歩兵と同じように戦闘をしなければならない〉

少尉は自分にいいきかせた。兵隊たちも、銃剣をみがき、銃の手入れをする。

敵の情報がはいってくる。

〈敵は上陸用舟艇で、続々

丸山軍曹（仁上陸中）

〈友軍の輸送は急速に悪化、敵は勢いにじょうじ、急速に接近中〉

中村隊長殿は、第二戦闘としての戦闘命令のくるのを待っていた。

八重瀬岳のふもと、喜屋武のいるところに泉があり、部落の婦人がアブをつくり水をすくってのんだ

原宇　山第三四七部隊下真一郎軍曹の母ハルさん（札幌市・写真）

七師団戦記

あゝ沖縄

<185>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

いのちをくれ

国のため死は覚悟

驚きもせず命に従う

六月十四日、中村部隊は、真栄のゴウへ移った。十七日の夜なか部隊長命令がでた。

〈真栄ゴウに、各将校を派遣せよ〉

橋少尉らはゴウで命令をうけた。

〈鈴木中隊＝第四中隊＝は、与座岳の工兵隊のゴウにはいり金山大佐＝山三四七六部隊長＝の指揮にはいれ〉

少尉は鈴木中隊のいる真栄里のゴウへ走り、そのむねをつたえ、真栄のゴウへもどって、中村部隊長に復命した。青の高いりっぱな中村少佐大佐は

「橋少尉は幾歳になるか？」

少尉は、としをきかれ、変な気がしたが

「はい、二十四歳であります」

大佐は、一瞬、さびしそうな顔をした。が、思いきったように

「眠していても、しっかりやってもらいたい……」

少尉ら第四中隊の出陣を祝って、二、三本残っていたビールで、最後の乾杯が行なわれた。

「まだ、人生の半分までもいっていないな。橋少尉、国のためだ、いのちをくれ……」

死は覚悟のうえの少尉は、おどろきはしなかった。部隊長は

「他部隊にわが一個中隊をやるのは、このさいおしい。だがどうせやらなければならないのなら、一番成績の優秀な中隊をやりたい。他部隊へゆき、そこの部隊にまけるようでは、軍旗の部隊のなおれになるからな……」配宮部隊長とのかねての約束だったのだ。

六月二十日ごろ、中村部隊長は第一大隊（第二六隊）の生き残り兵力と、自動車大隊（第二六隊）の第五、第六中隊を指揮し、師団直轄部隊となって、服部第二大隊長と真栄、新垣一帯に布陣した。

これは陸軍士官学校同期の間柄である。

中村大佐は、ばん馬大隊（第一大隊）の生き残り兵力と、自動車大隊（第二六隊）の第五、第六中隊を指揮し、師団直轄部隊となって、服部第二大隊長と真栄、新垣一帯に布陣した。

これは陸軍士官学校同期の間柄である。

橋少尉指揮の第二小隊は五百人前方の与座岳右はじに陣地をかまえるよう命令をうけた。

そこは、りっぱな陣地で、たてに廻りぬいた監視ゴウもあった。

監視ゴウから見ると、前方約二百メートルの丘から黒い煙がモウモウとたちのぼっている。山三四七六部隊の偵察（八千代大尉）

戦車が上陸し、ジープがさかんに走りまわっていた。

橋少尉指揮の第二小隊は五百人前方の与座岳右はじに陣地をかまえるよう命令をうけた。

そこは、りっぱな陣地で、たてに廻りぬいた監視ゴウもあった。

監視ゴウから見ると、前方約二百メートルの丘から黒い煙がモウモウとたちのぼっている。山三四七六部隊の偵察（八千代大尉）

・第二大隊栄光軍は火炎放射器付き戦車と航空機で攻め、はけしい陣地争奪戦がくりひろげられていた。ぜまい地域に長いつゆもとけてしまった梅雨大隊は

地前までおしよせてくるから、小隊は内郷攻撃班を陣地前方五百メートルの地点に配置せよ〉

夜であった。少尉は兵と最後の会議をすませた。タコツボを

じめ日本軍の捕虜は、日本人に増加してきた。

橋小隊は、十九日つぎの命令をうけた。

〈十九日、敵は、橋小隊の陣

戦死者をまつる芋の葉の下にもふもとの戦場

与座岳

（戦没者遺族・山三四七五部隊下真一郎遺族の母ハルさん（八幡市・年81）

戦争の犠牲者の遺族を慰問する少尉は、兵士は、黄色の旗を振いてタコツボにはいった。

七師団戦記

あゝ沖縄

<186>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

兵等上等老

よく戦ってくれた……

残りも少なく隊は解散

風雨を見上げながら敵戦車を待つ―いくら待ってもこない。兵隊は陣地に引きあげた。

二十日、敵戦車十数台を先頭に、そのすぐうしろに敵歩兵、さらに、五、六百付後方に二列横隊にならんだ米兵が、たばこをふかしながら攻めてきた。

栗小隊は、このドウクツ陣地で玉砕しようーと全員戦死を誓いあう。

敵兵は橋頭堡の石から石へ陣地へのぼろうとしている。

第一分隊長川上軍曹は敵兵以下数人をつれ、軍刀二本をもってゴウから出ていった。つづいて八代兵長（分隊長代理、札幌）も兵をつれて出てゆく。田中上等兵は爆雷をかかえ、みんなの見ているまえで戦車に体当たりした。

「川上軍曹戦死ッ！」

「八代兵長戦死ッ！」

悲鳴が陣地ゴウにはいる。敵戦車三台は動かなくなり、ほかの戦車で引っぱっている。一日じゅう、めしをくうひまもなく戦闘をつづける。夕方、敵は戦車とともに後方へさがっていった。

鈴木中隊長は残りすくない部下を集めた。みんなで一緒に死ぬのーという。

二十一日、今井伍長（小樽、早稲田大学卒）が、真っ暗闇、部隊本部から敵の重囲を突破して中隊にやってきた。彼は幸少尉と二名に入隊して乙幹になった人だ。

「金山大佐殿が、軍旗を焼いて自決しましたッ」

少尉は、砲弾のなかを突破してきた今井伍長の勇気と沈着な行動、その責任感に感心した。

伍長は、金山大佐の命令を伝えた。

「全軍の将兵が、よく奮戦したことを賞するとともに、このままここで自決するか、それとも戦局が有利となって、友軍が逆上陸することも考えられるので、そのときまで地下にもぐり、別動隊となって最後まで戦うか、それは各自の自由である…」

金山部隊長の意見について、鈴木中隊長以下将兵は熱心に論議した。

〈きょうは終わった、あすだ……〉

少尉が一息いれたとき、中隊から命令。

「夜上の敵軍を夜襲すべし」

与座岳山上は米軍に占領されてしまっている。夜襲要員は中隊の統ゴウから夜襲をかけようと、二、三人ずつ移動する。

小隊の統ゴウに射撃手を三人おき、敵をねらい撃つ。米兵が倒れると、敵は煙幕をはり、倒れた者を収容してゆく。その態度は、人命を尊重してヒューマンであるというだけでなく、火器によって合理的に戦う近代戦をやっていた。

結論として、国頭地区久志村部落を集合地点として、今夜、指揮班、第一、第二、第三小隊の順序で、三、四人が一組となり五分おきに陣地を脱出することが決められた。

「ただし、中隊は敵の重囲のなかにいるので、それぞれ各組の責任において行動すること。それまでは中隊を無傷する」

と鈴木中隊長は命令し、各人に力パン一袋、手りゅう弾数個を配給した。

午後六時すぎ、まず指揮班が脱出。栗少尉（広島町）は負傷等兵に包帯をしてやりながら

「元気でな…」

と、脱出成功の祈りをこめてささやいた。

の林喜三郎上等兵のそばへよった。

林上等兵は中隊一の年長者で第三小隊員。手は泥まみれの拳で負傷していた。少尉は、老上

奥武島丸島中の奥間味島で戦う米兵だが、本島でも攻撃隊形はこのとおりだった。

顔写　山第三四七五部隊下風一郎曹長の母ハルさん（札幌市・嘉似）

七師団戦記

あゝ沖縄

<187>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

宣撫班

生き残り兵を助け

終戦を知らせる

午後七時ごろ、鈴木中隊長は下浅信長らと四人組となりこうを出ていった。五分おいて、つぎの組。ふたたび五分後にもう一組が出た。

そのとき

「中隊長戦死ッ！」

悲鳴がこうへ。橋少尉は息を飲んだ。

〈しまった…中隊長戦死か…〉

からだの力が抜けてゆく。脱出のむずかしさが急にせまる。じっとしていられない不安感ー

そのうちにも、脱出組はつぎつぎとこうを出てゆく。第二小隊の番になった。

午後九時、橋少尉は、部下三人を連れ、こうを飛びだした。

与座岳からの照明弾であたり一帯、真昼のよう。砲弾の雨。まえを走る兵隊がバタバタ倒れる。照明弾が消えた。まっくらやみ。走る。照明弾があがる。ふせる。先頭は橋少尉、つづいて島山上等兵（石文）新城二等兵（沖縄出身で少尉と生意した）もうひとりの沖縄初年兵の順。走ってはふせ、走ってはふせて前進。前進。

〈八重瀬岳へまわろうか？〉

しかし砲弾が激しい。行けそうもない。前の奴は忘おりる。急に電灯がついた。

〈ヒアノ線にひっかかったなッ！〉

戦車が三、四十ヤードならんでいる。自動小銃弾の猛射。

〈敵戦車の集結場所だッ！〉

「さがれッ…いまきたほうへ

少尉の絶叫。まわれ右をして走る。

〈島山がいない…〉

「島山ッ！…島山ッ！」

米軍に収容される疲れきった日本軍

〈島山ッ！…島山ッ！〉

少尉が走りながら叫ぶ。答えがない。

〈やられたかな？〉

敵兵がわめきながら乱射する。

〈ひきかえそう。とても進めない〉

三人が与座岳をまわるころ、

〈八重瀬岳へ〉

〈島山ッ！…島山ッ！〉

〈敵戦車の集結場所だッ！〉

「さがれッ…いまきたほうへ

〈ヒアノ線にひっかかったなッ！〉

〈やられたかな？〉

〈ひきかえそう。とても進めない〉

〈八重瀬岳へ〉

〈島山ッ！…島山ッ！〉

〈島山がいない…〉

「島山ッ！…島山ッ！」

〈島山ッ！…島山ッ！〉

〈島山ッ！…島山ッ！〉

〈島山ッ！…島山ッ！〉

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

宣撫班員から聞いた敗戦の話に、橋少尉はその夜ねむられなかった。

〈あすのあさ、ジープで米軍の大尉、中尉、幌川二世がくる…〉

ねぐるしい夜があけた。七人は宣撫員し、橋少尉を一同の責任者としてえらび、米軍との交渉にのぞんだ。

午前八時、米軍将校と対面した橋少尉は

「日本軍が敗けたという証拠を見せてくれれば、明朝、武装解除に応ずる」

幌川二世が通訳し、少尉は午後六時までに帰る約束のうえ、ジープに乗せられた。

まず、見せられたところは、宣撫班のいる宿舎だった。ここでは日本軍の将校以下約三十人が、米軍の指揮にはいり、宣撫しながら日本兵をドウクツから助けだす仕事をしていた。

つぎに、教会へ連れてゆかれた。天皇陛下の終戦のおことばが録音盤となって放送されていた。

少尉は、それを聞いた。涙がとめどなく流れ、泣けて泣けてしかたがなかった。

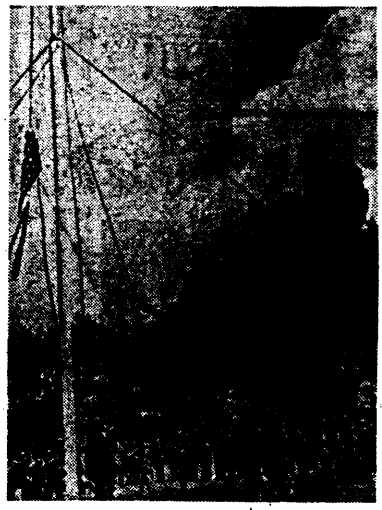
終戦を確認

屋ころ、少尉はジープで石川収容所へ案内された。山兵団生存者中の最上級者・北嶽格郎大佐（山三四七五隊長）に面会した。

翌日、四十数人の日本兵は武装解除をうけ、石川収容所にはいった。

武装解き収容所へ

終戦のことば録音で



六月二十二日、降参旗をあげる米軍

橋少尉は、収容人員中に、鈴木中隊の者が意外にすくないことを知った。

〈みんなは、まだ、なにも知らずにドウクツ内にたてこもり不自由な生活をしているにちがいない。戦争は終わったのだ。かわいそうに、助けてやろう〉

すぐ宣撫班に参加した。思い出もなきなましい戦場一人宣撫員から終戦を教えられ、救助された。

橋少尉は、タバコやかん詰めをいっぱいもらい、みんなが心配して待っている現地へジープで送りかえされた。

少尉の話をきいた人人は、それぞれ手分けして生存している日本兵をさがしだし、夜ひるかかって戦闘を終えるよう説得した。

〈戦死したんだ。みんな内地に入ってこの日のため、同胞のために死んでゆかれたのだ…〉

からたのなかを、冷たい風が吹きぬけるようなさびしさに

「はげしい戦闘で、大隊がどこにうまって…だが、みんなよく戦いました！」

〈最後兵の名が行方不明、補充兵のあなたがたが…〉

記者は、とうとうと語る戸川少尉のことばに耳をかたむけながら、その日やけした細長い顔のうえに、もう一つ、胸中にうかぶ複雑な顔をダブラせて見ていた。

× × ×

記者は、ことし一月二十六日釧路駅前剣正館で、義政雄さんが、上士幌町然石平の清山巳さん（山三四七六部隊）と十九年ぶりの感激の握手をかわす場にいあわせた。

清山さんは宣撫班の橋さんから終戦を教えられ、救助された。

清山さんは、「はじめ、宣撫班員の話をうたがった。敵方のおいがあって数十人を助け出すことができた。しかしこれら収容者中にも、鈴木中隊の者はひとりもいなかったことだ。

また、そこには宣撫班員内の戸川実さんがいた。彼は昭和十七年五月、旭川北部第六部隊松家利男大尉（札幌市南十七西六、戸籍係）の第二内務班に入隊、記者とは級友だった。

あい、宣撫班員の話に、橋少尉はその夜ねむられなかった。

〈あすのあさ、ジープで米軍の大尉、中尉、幌川二世がくる…〉

ねぐるしい夜があけた。七人は宣撫員し、橋少尉を一同の責任者としてえらび、米軍との交渉にのぞんだ。

午前八時、米軍将校と対面した橋少尉は

「日本軍が敗けたという証拠を見せてくれれば、明朝、武装解除に応ずる」

幌川二世が通訳し、少尉は午後六時までに帰る約束のうえ、ジープに乗せられた。

まず、見せられたところは、宣撫班のいる宿舎だった。ここでは日本軍の将校以下約三十人が、米軍の指揮にはいり、宣撫しながら日本兵をドウクツから助けだす仕事をしていた。

つぎに、教会へ連れてゆかれた。天皇陛下の終戦のおことばが録音盤となって放送されていた。

少尉は、それを聞いた。涙がとめどなく流れ、泣けて泣けてしかたがなかった。

屋ころ、少尉はジープで石川収容所へ案内された。山兵団生存者中の最上級者・北嶽格郎大佐（山三四七五隊長）に面会した。

翌日、四十数人の日本兵は武装解除をうけ、石川収容所にはいった。

橋少尉は、収容人員中に、鈴木中隊の者が意外にすくないことを知った。

〈みんなは、まだ、なにも知らずにドウクツ内にたてこもり不自由な生活をしているにちがいない。戦争は終わったのだ。かわいそうに、助けてやろう〉

すぐ宣撫班に参加した。思い出もなきなましい戦場一人宣撫員から終戦を教えられ、救助された。

清山さんは宣撫班の橋さんから終戦を教えられ、救助された。

清山さんは、「はじめ、宣撫班員の話をうたがった。敵方のおいがあって数十人を助け出すことができた。しかしこれら収容者中にも、鈴木中隊の者はひとりもいなかったことだ。

〈戦死したんだ。みんな内地に入ってこの日のため、同胞のために死んでゆかれたのだ…〉

からたのなかを、冷たい風が吹きぬけるようなさびしさに

「はげしい戦闘で、大隊がどこにうまって…だが、みんなよく戦いました！」

〈最後兵の名が行方不明、補充兵のあなたがたが…〉

記者は、とうとうと語る戸川少尉のことばに耳をかたむけながら、その日やけした細長い顔のうえに、もう一つ、胸中にうかぶ複雑な顔をダブラせて見ていた。

× × ×

記者は、ことし一月二十六日釧路駅前剣正館で、義政雄さんが、上士幌町然石平の清山巳さん（山三四七六部隊）と十九年ぶりの感激の握手をかわす場にいあわせた。

清山さんは宣撫班の橋さんから終戦を教えられ、救助された。

清山さんは、「はじめ、宣撫班員の話をうたがった。敵方のおいがあって数十人を助け出すことができた。しかしこれら収容者中にも、鈴木中隊の者はひとりもいなかったことだ。

また、そこには宣撫班員内の戸川実さんがいた。彼は昭和十七年五月、旭川北部第六部隊松家利男大尉（札幌市南十七西六、戸籍係）の第二内務班に入隊、記者とは級友だった。

「はげしい戦闘で、大隊がどこにうまって…だが、みんなよく戦いました！」

〈最後兵の名が行方不明、補充兵のあなたがたが…〉

記者は、とうとうと語る戸川少尉のことばに耳をかたむけながら、その日やけした細長い顔のうえに、もう一つ、胸中にうかぶ複雑な顔をダブラせて見ていた。

（連載）山岳三四七六部隊下風一郎宣撫の共ハルさん（札幌市・事務）

七師団戦記

あゝ沖縄

<189>

戦没一万八千五百柱の霊にささげ

細田久雄曹長（函館市東雲町）

軍馬もなく徒歩で

兵器、夜を待っては運ぶ

輸卒

函館防衛司令部、警防隊長）の手記から山三四八三部隊（輜重兵第二十四連隊）の行動をつづる―

☒　☒

細田曹長（当時軍曹）は、第二大隊（自動車大隊）第五中隊（長・小松保明中尉・山形県酒田出身、二十年六月二十一日真栄平で戦死）に所属していた。

第一小隊長近藤少尉（六月二十二日戦死・札幌）第二小隊長八幡少尉（六月二十一日真栄平で戦死・苫小牧）第三小隊長本間少尉（札幌）細田軍曹は第二小隊の分隊長だった。

米軍上陸の四月一日夜、細田軍曹の分隊は、馬匹輜重隊付の第川に出動を命じられ、富盛の部隊本部を出発した。途中、地獄の様相を呈してあるーと指示されていたので用心しながら進み、第川に到着した。

浜へそそぐ川の川岸一帯は、魚市場側町北八軒六三）らがいた。加藤軍曹は、輜重隊第一大隊第二中隊（米隊隊）の伍長だったが、二十年三月二十二日第一大隊の下士官十余人とともに、第二十八戦隊に転属になったもので、この時は、戦友たちと特攻ボートの収容に大わらわだった。

細田軍曹ら輜重隊の任務は、敵軍の偵察をまぬがれた特攻ボートを山中にかくす輸送にあった。

浜上からの艦砲弾が激しくサク裂するなかで、決死的な作業は、一日、日曜日以降、日本国内で女子供がくちずさんだザレ歌であるが、ノモンハン戦に輜重隊小隊長で参戦した鈴木貞太郎少尉（十勝・西田小学校長）は

―竹ヤリ戦争時代の残滓では考えられない数字である。輜重隊戦没者名簿のみたまに尊敬と感謝の心をこめ、ここにこい福を祈る。

ルに到着した。

細田軍曹ら輜重隊の任務は、敵軍の偵察をまぬがれた特攻ボートを山中にかくす輸送にあった。

無灯火行進のため、トラックがミゾやがけ下に落ちたり、前の車に追突する事故が続出したが、一カ月ほどもすると、兵隊はやみのなかでも、ものが見えるようになり、事故はなくなった。

昼間は、兵隊はゴウのなか、トラックは林やゴウのなかにかくし、敵機、敵弾をさけていた。

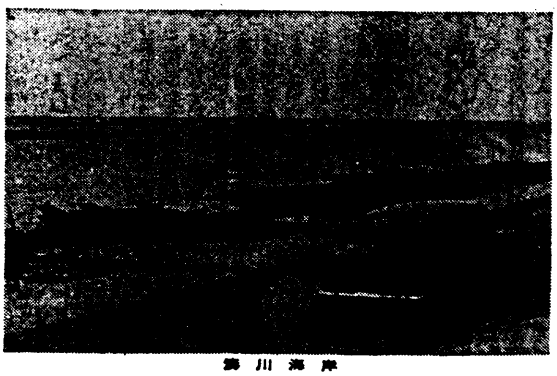
軍馬を失った第一大隊員は第二大隊が戦線へ輸送した弾薬や、さらに前線へはこぶ徒歩部隊となって活躍したため、戦死者が激増した。

さらに、大隊第一大隊長は、みずから陣下を指揮し、首里北方の井ケ岳で生還を期さない切り込み戦を敢行、全員肉弾となって散った。

「輜重輸卒が兵隊ならば、電柱に花が咲く」

「最前線のザンゴウ内は、考えるほどタマをうける率はすくないが、後方陣地との中間地帯は激しいものです」と語っていた。

（平七百八十三番四十二人



第川海岸

原子　山第三四七五部隊下風一郎曹長の母ハルさん（札幌市・琴似）

七師団戦記

あゝ沖縄 <190>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

山二四八二部隊の本部は、首里―南風原の中間の谷間にあった。各中隊は本部のゴウから指令をうけとり、前線への輸送任務についていた。

五月中旬、雨期にはいり、道路は砲撃と雨で泥田にかわった。そのなかで、前線へのトラック輸送は困難をきわめた。

輜重隊は、八重瀬岳付近の弾薬ゴウから前線への輸送任務についていた。そのコースの南風原の十字路は前線にいる山兵団のただ一本の補給路だった。夜昼なしの砲弾撃で十字路は補修するあとから破壊された。

だが、この十字路は山兵団の生命線、いかに破壊されても確保しなければならなかった。

十字路付近、相当数の兵隊がタコツボを掘ってかくれひそんでいた。

敵とは、砲撃がやむとすぐ、タコツボから飛び出し、全力をあげて道路の補修工事をする。砲撃中でも輜重部隊がくると、タコツボから出て作業にあたるため、戦死者が続出していた。

探知機

エンジンの音とらえ

すぐ雨のような砲撃

細田軍曹は、ここを通過するたびに、戦闘のえんの下の力持ちとして戦死してゆく戦友のめい福を祈った。

だれもほめてくれない。だれも認めてくれない。だが、俺は知っている。俺たちも同じえんの下の力持ちだからな…。

なんという部隊であったのか、この十字路守備隊の名は永遠にナゾのままだろう。工兵部隊か輜重部隊同様、戦死者が多く、戦線が敵に押されてからは、戦線が敵に押されてからは、夜間の輸送作業は、サク裂音とともに、砲撃がやむとすぐ、東風平部隊の通過が続のコースとなった。

夜ごと、部隊を通過するたびにトラックは砲撃をうけ犠牲者が出た。敵は、トラックのエンジンの音を探知機でとらえ、それを目標に砲撃するらしい―ということがわかった。そこで対策を考えた。

一台のトラックに、特にエンジンの音を高くさせて東風平部隊を通過させた。かぜん、ものすごい砲撃が開始された。ほかのトラックは、闇のなかにかくしてあった。砲撃がやんだ間、かくしてあったトラックを走らせ、無事、全車西通過させることができた。

首里の攻防戦に敗ついた将兵は、首里―南風原間の「赤土のゴウ」にいっぱいになっていた。

輜重隊は、弾薬を前線に運搬すると、この野戦病院から三千人くらいの負傷兵を運んで後方へさがる。

雨期には米軍もなやまされた。はんらんする川を、負傷兵を沖縄の学生に運ばせる米軍

しかし、山兵団の戦況が、日ごとに不利になってゆくことは、輜重隊にはよくわかった。弾薬をおろす場所が、首里の戦線から日を追って後退していたからである。

これをトラックで後方の野戦病院・壕付近へ運んでさがるのが、そこも負傷兵でいっぱい、負傷兵をおろしようがない。軍医や衛生兵は、ことに厚者をおろし、夜あけまえに毒殺にかえり、車をかくしてしまわねば、かなら子場に、負傷兵をおろしようがなく、うすれはいいんだ…。

石、茸、山名兵団の手足のないもの、目の見えないもの、その他負傷した多数の兵隊が、仮の手当てのまま、何日も放置されていた。

「これ以上、負傷兵を収容する場所がない。いくらつれてきても、もう受けとれないぞ」

と同時に、砲撃の破片と土、石が付近一帯に飛びちる。トラックはどこかを破壊され、かなりの戦死者が出た。だが二日といえど輸送を休むことはできない。

輜重隊のこの苦労にたいし、牛島司令官から感状が贈られ、感激した中村部隊長は、部隊全員に「全部隊は、全力をあげ、戦局を有利に好転させる努力をはらうように」と厳命がくだった。

七師団戦記

あゝ沖縄

<191>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

西館なまり

友の消息尋ね合う

同郷の二人、戦いさなか

野戦病院を追いはらわれる。

〈今夜また、弾薬輸送をしなければならないのだ。きみたちを乗せていたのでは、それができない。任務のためだ、ゆるしてくれ…〉

細田軍曹らは、松林にトラックをとめる。二十二、三らいの負傷者をそこにおろす。

〈うらむなよ。これより方法がないのだ〉

心を残しつゝトラックをとばし基地へもどる。

翌日もまた、野戦病院でとわられた負傷兵を松林におろす。

そこには、すでに息絶えたもの、傷口に真っ白にウジをわかし、やっと息をしている者、水を求める叫び、苦しむ声〜〈かわいそうだが、やがておれ自身も、これら同じ運命におかれるのだ…〉

細田軍曹は、なんら手当てをうけずに苦しみ叫ぶ負傷兵の姿に、あすのわが身を思い、手りゅう弾をにぎりしめた。

〈いよいよのときはこれだ。ひと思いに死ぬにかぎる…〉

「一七〇部隊の細田軍曹はいないか？」

片足の下士官に声をかられた。

〈小原軍曹…樺太で対空無線の教育を一緒にうけた…〉

小原軍曹は、機銃第二十四連隊・暫兵連隊所属で、山形県出身者だったが、悲しそうな声で

「おれの部隊は、首里の前方戦線で、ほとんど全滅してしまった…」

と涙をながした。

現地徴用をうけた人夫たちが、ゴウから担架で負傷兵を運び、トラックにのせていた。雨のため地面がぬれていて一組の人夫がころんだ。大地になげ出された負傷兵が函館湾のアクセントで怒鳴った。

「このバカ野郎ッ、気をつけろ」

細田軍曹は、その負傷兵につかしさを感じ、声をかけた。

「きみは山部隊か？」

負傷兵は徴用人夫に助けおこされながら

「そうだ。山二四七四だ」

「そうか。そんなら、函館の亀田町出身の海賊雄伍長を知らないか？」

軍曹は、函館病院から出征した同郷の安否をたずねた。

負傷したあとの破傷風、ガスエソで苦しみもだえながら死んでいく兵隊の姿をたくさん見ていた。その苦しみからのがれる手段として二発の手りゅう弾を、つぬにかけたからはなさなかった。

× × × ×

ある夜、細田軍曹は赤土のゴウで負傷者輸送の指揮を大声でとっていた。その時

「森・伍長は追撃砲で戦死した。おれは森町出身の伊藤軍曹だが、きみも函館か？」

同郷のふたりは、トラックが出発するまで、みじかい会話をかわした。後方の野戦病院の状況を知っている細田軍曹は、この伊藤軍曹もまた松林にすてられることを思い病が痛んだ。

× × × ×

ついに第一部隊にも、前線出動の命令がくだった。前線の歩兵部隊が大損害をうけたのである。

第一大隊（ばん隊）を主力とし、第二大隊（自動車）も、運転に必要な最少の人員をのこし、第三中隊（自動）、第三中隊長（函館）らの手

まねれることはつらかった。

「おそかれ、はやかれおれたちもゆく、さきに行っていてくれ…」

軍曹は牧野・歌次郎兵長（函館）に必死の人員をのこし、それ以外の全員を参加させた。

第天の綱州五二年、抑留に送ってからは、生死をともにして戦いぬいてきた戦友たちと、い

なにきり、第一大隊へ送った。

彼らはチガ岳で戦死した。

原字・山第二四七五部隊下風一部豊太の母ハルさん（札幌市・解体）

ことし一月二十六日、札幌駅前銅正館で行なわれた沖縄同友会総会

七師団戦記

あゝ沖縄

<192>

戦況、しだいに悪化

切り込みで大半失う

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

山三四八二部隊（九七五部隊・第二十四師団通信隊）についてわかっていることは、隊長が保科清一郎大尉、無線隊長宮川中尉、有線第一小隊長根本少尉、第二小隊長鳥信尉。生存者としては伊藤徳五郎さん（札幌市月寒西二条七丁目）と鶴川政勇さん（旭川市新旭川中の島）から連絡をうけている。

この部隊は十九年八月五日朔軍上陸。二十年三月三十三日から、与那原の師団司令部を基点として、第三十二軍と師団内各部隊間の通信にあたっていた。

四月二十四日から山兵団司令部とともに、戦線山、首里に前進。六月六日、宇江城に後退。六月二十三日終戦、通信連絡がとだえた。

生還者の鶴川さんが、戦死した佐藤勝兵長の遺骨をもってただ一人手記によって、この部隊の行動をたどる。

通信隊

十八日、十九日と敵の猛攻をうけ、死傷者が続出。二十日、藤川分隊に切り込み戦敢行の命令がくだった。

藤川兵長は佐藤上等兵はじめ兵隊の大半を失い、以後、戦況はしだいに悪化した。

五月下旬、米軍は首里の第三十二軍司令部へ迫ってきたので、六月上旬、司令部は糸満地区の摩文仁に後退した。

保科隊は真栄平の新旭部隊にさがり、通信任務についていた。

六月十八日、米軍はわが第一線を突破し、新旭付近も安全を現わしたので、通信隊の保科部隊も戦闘部隊となって戦闘に参加した。

十一時ごろ、陣地に敵戦車の攻撃をうけた。午後一時ごろ、藤川兵長は伝令の任務を命ぜられ、真栄平の部隊本部へ出発することになった。

切り込み隊は、陣地前、四百㍍の地点で敵の迫撃砲の火網のなかにふみこみ、敵の軽迫撃砲、重、軽機関銃の集中攻撃をうけ、戦死二人、重軽傷者五人をだし、切り込みは不成功に終わった。

藤川分隊長は宍戸上等兵に対し重傷者をつれ陣地へ後退するよう命令した。そのとき、佐藤上等兵は頭部破片創、腹部貫通の重傷をうけていた。

藤川分隊長は佐藤に破片創をうけていたが、任務遂行のため、ひとりで敵状偵察に出発した。

二十一日朝四時、偵察を終えた藤川分隊長が陣地に帰ったとき、佐藤上等兵はベッドに横たわり、元気そうに笑っていた。

藤川兵長は佐藤上等兵はじめ兵隊の大半を失って真栄平の本部に集結。藤川兵長は二十五日、切り込み戦に成功、敵軍後方の山の中にはいり、十一月十八日、宣部から帰ってみると、佐藤上等兵は足をひきとったあとだった。

軍医は

「天皇陛下万歳をとなえ、藤川兵長によろしく伝えてほしい」

二十二日、通信隊は戦友の大半を失って真栄平の本部に集結。藤川兵長は二十五日、切り込み戦に成功、敵軍後方の山の中にはいり、十一月十八日、宣

米軍をなやせた摩文仁の高地

戦没の通信隊員

山三四八二部隊（九七五部隊・第二十四師団通信隊）

戦没者の氏名、年齢、出身地、部隊名、階級、戦没年月日、戦没地

（略）

戦没の部隊員

部隊の総員は約五百四十人。現在生存者は九人。

五月五日の山兵団総攻撃で歩

「お、おかあさん！」

山三四七五部隊下風一郎軍曹の母ハルさん（札幌市）

戦争の前日で、戦闘行動を終えれわれる感慨で、しきりに「おかあさん！」「おかあさん！」と母をよびながら息をひきとった」といっていた。最後には、うつ

といっていた。

七師団戦記

あゝ沖縄

<193>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

沖縄の土

最後の突撃を敢行

わずか30人の木口隊

山三四七四部隊第十一中隊（長・木口好大尉）の総攻撃（五月四日）には、長崎県出身上等兵（浜平市茂尻旭町五番四号二名）は、負傷のため参加していない。遺族資料その他関係者の書きによると、

四月中旬頃、木口中隊長は中隊の全員を集めた。配置編成隊をいれ、はじめ約二百三十人いた隊員は大半が戦死、負傷し、戦闘できる者は、もう三十一人より残っていなかった。

二十四歳の木口中隊長は総攻撃の命令を二回につたえ

「自分と一緒に、みんなで戦死した友のところへ行こう、沖縄の土になろう」

と前示した。相撲部長山西福助が

「隊長殿、やりましょうッ」

と声をかければ木口大尉は「おおッ」と、男らしくうなずき、全員で三回、おたけびをあげ、陣地を飛び出した。

木口中隊長は小銃をにぎり、工藤衛生兵は中隊長の軍刀をふりかざし、全員突撃隊員となって進んだ。

兵隊は小銃と手りゅう弾だけ。木口中隊の最後を飾る死の突撃であった。

遺隊資料によると

人単の企画せる総攻撃にあたり、山三四七四部隊は中央突進隊となり、山三四七五部隊、山三四七六部隊の中央のうしろを前進するよう命ぜられ、その一部をもって海兵西側台地にある敵を駆逐して、右第一線遊隊山三四七六部隊の攻撃に協力するよう命ぜられるをもって、第十一中隊（木口隊）は已に命じ、攻撃を実施せむ。敵兵の突撃支援射撃に開始して第十一中隊長木口大尉以下全員猛進せり。

木口中隊は、約三十人進んだ。そこに敵の第一線陣地があった。敵は攻撃してくる木口隊の姿を見て、あわてふためいて

だんだんでくやしがり

「失敗したッ」てな弾幕や機関銃をもってればよかったッ

第三陣地へ突進、全員玉砕した。

あとからついた部隊が、木口中隊の占領地を足がかりとして敵を攻撃し、この付近の戦闘

地を木口出と名付けた。

木口隊の三十一人に東司令官感状が贈られ、新聞特進の栄誉が与えられた。名前の判明している人々はつぎのとおりである。

木口好大尉、山西武久准尉

（沖縄の土—高手納飛行場に展開する爆撃、ゼロ戦も動やす沖縄の婦人）

クレントとして、華麗な時代解説（宝記軍曹（上山郡）早坂芳治上（浜内）北川栄上（新潟）工藤衛生兵（函館）本間祐弘上（小樽）伊藤行雄上（浜内）伊藤弘上（森町）氏家武雄上（亀田）大黒光雄上（浜内）田中勇弘上（函館）土谷芳治兵（松前）宗谷正治郎上（浜内）

赤のごとい福を祈る。

一、明るく輝く正しかる婦人

撃その他で沖縄の人気を沼して

くらけるおられる。

ナ国境をとる、若人章（おおひとぞう）に残りなく輝（ひじ

原撃　山三四七五部隊下風

り）の若き国民（くにたみ）に一部隊長の後ハルさん（札幌市

さとし）厳しい神智。

一、わが大きにつかえと

戦没正衛生兵（函館）渡辺上（小樽）佐藤上（小樽）沖縄初生みたまいたる母（たらちね）を尊くおろがみ崇しまつる

いま神兵と遊ばれて　北辺の鬼

わゆるむなし。（以下略）

ここに「木口隊中隊長」（木口好大尉作詞、前原誠司軍医作曲）をかけ、中隊長殿、現在、沖縄那覇市崇町八〇番地で病院を経営、沖縄テレビの

七師団戦記

あゝ沖縄

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

<194>

独断

指示のない不安感

対空遮へい工事実施

山三四七四部隊第二（平野）大隊は、石兵団第二ん護の任務を終えるとすぐ連隊の指揮下にもどった。

第二大隊は、鏡地部落西南の一四〇高地から左へ展開して陣地配備についたが、五月四日、つぎの任務を与えられた。

〈わが第一線攻撃部隊が、敵の第一線陣地を突破すると同時に、平野大隊は夜襲をもって前線部落を攻撃、夜明けまでに同地を確保すべし〉

この任務達成のため、第二大隊は指揮下の各隊のほかに、工兵一個中隊、独立機関銃一個中隊、迫撃砲一個小隊、第二十七野戦高射隊（十二門）などの部隊をうけた。

幸地南駅の線は、第二大隊が第一線に進出して以来、三十日間ずっと苦戦をつづけたところである。

とくに柳原部落は、第二大隊が、つい二、三日前まで戦闘したところだったので兵隊は地形をよく知っていた。参謀部や連隊長の今回の指揮は当然であるとて、田中松太郎曹長（札幌部広局村）は思った。

いよいよ五月四日、薄暮攻撃の第一線部隊に接近するため、第二大隊は指揮下の各部隊を、一四〇高地、一五〇高地から東南東の丘へ前進させた。そこからは南部岸が見えた。

大隊長は、敵況をはるかして、幸地南駅の線は、第二大隊が第一線に進出して以来、三十日間ずっと苦戦をつづけたところである。

とくに柳原部落は、第二大隊が、つい二、三日前まで戦闘したところだったので兵隊は地形をよく知っていた。参謀部や連隊長の今回の指揮は当然であるとて、田中松太郎曹長（札幌部広局村）は思った。

いよいよ五月四日、薄暮攻撃の第一線部隊に接近するため、第二大隊は指揮下の各部隊を、一四〇高地、一五〇高地から東南東の丘へ前進させた。そこからは南部岸が見えた。

大隊長は、敵況をはるかして、第二大隊の攻撃部署をきめるとともに、第二機関銃中隊長佐藤中尉副官、伝令の三人をつれ、第一線の攻撃部隊と先発。大隊各隊の誘導は、田中曹長に命令された。

曹長は夕闇のなかを、大隊長に命令された地点・幸地部落に近い丘の傾面まで各隊を誘導し、そこで大隊長からの前進命令を待った。

午後九時になった。大隊長からは、なんの連絡もない。第一線陣地からは、大砲、機銃の音が、こやみなくひびいてくる。待機中の曹長ら第二大隊員の身辺に小銃、機銃のタマがプスプスつきさる。死のおそるべきこと、指示のない不安感が身にせまってくる。

〈どうしたのだろう？〉

夜中の十二時になった。ついに平野大隊長は帰ってこない。

〈攻撃攻撃は失敗したな？〉

田中曹長は各隊の命令受領者を集めた。

〈各隊は、夜あけまでに対空遮蔽工事（しゃへい・飛行機からの攻撃をさけるための工事）を実施せよ〉

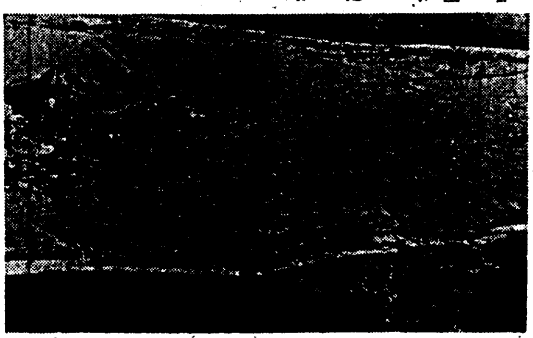
曹長の命令は、つぎの判断によるものだった。

〈現在地点は、地上の敵軍からは死角になっている。しかし右側の中城湾方向からはまる見えだ。このまま朝をむかえれば全員が飛行機と中城湾からの艦砲射撃で、みんなやられてしまう。

夜襲攻撃の地点は、ここからさらに一キロも前方である。強行夜襲をするにしても、十二時までには攻撃準備地点に到着していなくては、夜襲の成功はおぼつかない。そのことは大隊長が終わった。東の空がしろじろと明るみはじめるころ

「田中ッ／田中ッ／攻撃は失敗だ。部隊はだいじょうぶか？」

かわらず、いまだに帰ってこなければ、連絡も命令もないのは、ただごとではない。まこ・？」



米軍は航空写真を最高度に利用した。機械力利用一日本軍の盲点ではなかったのか？

まこ・ちょっと解ってみるべきだ〉

と考えたからだった。

× × ×

五月五日、真夜中ごろ、第二大隊

平野大隊長が帰ってきた。

顔字　山第三四七五部隊下風一郎曹長の担ヘルさん（札幌市・時計）

七師団戦記

あゝ沖縄

<195>

戦没一万八千五柱の霊にささぐ

死と対決

休まぬ米軍の攻撃

じっとタコツボにひそむ

田中軍長は、対空編隊作業で部隊をかくしたことを大隊長に報告、大隊長は、この処置をよろこび、さらに効果を先生にすること、天幕部をとるようにけ呼くすることを命じた。

午前七時ごろから敵の攻撃がはじまった。田中軍長と有馬曹長、当番兵の三人は、大隊長から五百メートルほどはなれたところに穴を掘ってはいった。穴の上に部落からはぎとった板一枚をのせ、そのうえに土を二十センチほどかぶせ、偽装網、イモづる、雑草などをはわせた。前後左右に機銃をおき、敵の来襲を警戒しながら、明日のサク裂する砲弾に怒をつめていた。

きのうから一睡もしていない。疲労困憊の上に、敵の上空は風におそれられる。弾道弾に、しきりに砲撃が続く。ふるえ、みちなく、ちまくる敵の砲兵隊れ落ち、三人とも半ばが埋まる。に部、天幕をコツボにひそんでしまった。

散弾の嵐をうかがいながらの作業をはじめる。明日を弾導サク裂。その破片が、田中軍長の胸に命中、思わずうめいた。破片は二枚がさねの厚さがあるかのようと思いたった。五十年配の保護いか、夢遊病者のような男が、曹長部落方向からとの敵弾のサク裂するかのようにフラフラと歩いてきたのだ。

〈あれは、あさの八時ごろだった〉

〈あれは、あさの八時ごろだ〉

だまされたった。

〈あれは、あさの八時ごろだ〉

われて、一枚になっているところを突きやぶったのだ。おそるおそる陣地をあてがってみる。通かくれひそんでいることをにくやようど、帯革（たいかの方法で敵に知らせたのではあるまいか）それで、こんなにしつこく激しく砲撃するのではないだろうか？

死神にとりつかれたような時間―その推移のなかで、軍長は目前に迫る無気味な死と、じっと対立していた。

正午ごろ、いままでの攻撃命令に変わって、敵陣地を撃せよ、と新命令が伝えられた。

第二大隊は第三（田川）大隊の左側に位置し、敵方向に工字型になっている丘に兵、六、七の各中隊を配備した。大隊本部は二四〇高地に位置し、本部の右五十メートのコウに配備、左には、山三四七六部隊の改編直機関銃中隊、その左に第二（佐藤）機関銃中隊、一五〇高地近くに大隊砲、追撃砲の陣地をかまえた。ここで第二大隊は、五月五日から二十四日まで、第一大隊と第三大隊が全滅しても、なお陣地を死守しつづけたのである。

第三大隊は第二（佐藤）大隊の右側に位置し、敵方向に工字型になっている丘に兵、六、七の各中隊を配備した。大隊本部は二四〇高地に位置し、本部の右五十メートのコウに配備、左には、山三四七六部隊の改編直機関銃中隊、その左に第二（佐藤）機関銃中隊、一五〇高地近くに大隊砲、追撃砲の陣地をかまえた。ここで第二大隊は、五月五日から二十四日まで、第一大隊と第三大隊が全滅しても、なお陣地を死守しつづけたのである。

第三大隊の各中隊は、青見城、宇栄田、伊良波、倉長、保栄茂（ひん）、我那覇の各残敵隊から編成、病弱者の全員をこの第一線にかりだし、各中隊は約五十人、合計約百五十人の人員が陣地についたとも、多くは戦死者を出しながらも、この戦闘を続けていた。

佐野壮一中尉、大浦真治中尉、黒田中尉の各中隊長は、いずれも身に敵弾をうけながら、戦列をはなれず、下士官が中隊長代理となって、と・一四〇高地から南地部落西方につらなる丘の陣地から一歩もひかなかった。

（ここに載る写真は一人で十人の日本軍を倒したという一兵隊のうえでは、たしかにそうだが！）

写真　山田三四七五部隊下風の陣地から南地部落西方につらなる丘　一部軍長の妻ハルさん（札幌市

七師団戦記

あゝ沖縄

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

<196>

本望

鉄輪のさびになろう

友の死守したこの陣地で

十数台の敵戦車隊が二百人あまりの歩兵をしたがえ、第二大隊の陣地に迫ってきた。

「きょうで最後だ…」

つぶやいたのは迫撃砲小隊長米内軍曹。彼は第二機関銃中隊から迫撃中隊に転属してきた函館連隊区出身者だった。

田中喜夫も、これで第二大隊を全滅と覚悟した。

眞剣そのものの攻め寄んでくる敵戦車・米内軍曹指揮の迫撃砲隊が一斉に火をふく、たちまち四台に命中、動かなくなる。ほかの戦車は反撃して退却をはじめた。敵兵も後退してゆく。大隊の危機を救った米内軍曹は

「田中喜夫殿、もう残弾がありません。軍に弾薬があれば、部下全員でいまから明朝までに撃ちます。どうか司令部へ電話連絡を願います」

さすがに緊張である。しかし司令部に連絡があってから、この砲弾と、敵軍にとりかこまれたなかを弾薬輸送をすることは至難だった。米内軍曹は涙を流して残念がっていた。

また、第七中隊の戦闘員は、続出する戦死傷者のため、残る陣地を保つことは至難です。

陣地で、自分は第七中隊最後の下士官として敵戦車の鉄輪のさびとなることは本望です。

たとえ、大雨がきても、中尉がきても、一日どころか半日も

各中隊は、敵戦車と火炎放射の火でかこまれていた。各隊と

長は、たゞ二言こうだ、よし」といっただけ。田中喜夫は

「幸岡、ありがとう」

心のなかでお礼をいった

兵隊たちは、小銃がためになると、散乱する死体の中から使用できる小銃をさがしだして戦い、やられた地下タビと戦死体のクツをはきかえて一四〇高地死守の戦闘を繰続した。

るんだ。黒田中尉、大浦中尉、佐野中尉は戦死し、各隊の小隊長も全部死んだ。俺だけが機関銃一つないこの第二機関銃中隊に生き残っている。

何度か機関銃、兵員の補充をうけ、その全部を失ったいま、機関銃中隊の任務は終わった。もうゆるしてくれ、もう死なせてくれ」佐藤中尉の叫びは悲痛

後の下士官・寺岡軍曹は二日間眠のなかにいれていますので、

第七中隊こがいの残りの部下たちと、また二日はがんばれます。

田中喜夫は大隊本部左横約三十尺の陣地へ敵情視察のため進んだ。身辺で手りゅう弾がサク裂する。そのなかをはって第二

機関銃中隊のコウへはいった。

青い野戦出身の中隊長佐藤長太郎中尉がいた。

「おい、田中。本部はいつまでいる命はなかった。あなたからの返信をもって帰ってきさい」

激烈な戦闘中、感傷にひたっ

せた。やがて伝令は、寺岡軍曹

と書き、伝令に渡たせて走ら

なさるとう負傷兵中をしてくだ

百十五人になってしまった。敵陣、戦闘の慣例のとおりとく

に三方所も負傷し、戦闘指揮が

とれない。

田中喜夫は通信紙に大本部から下士官一人を派遣、第七中隊の指揮をとらせるから、寺岡は大隊本部のコウに後退せよ」

と書き、伝令に渡たせて走ら

いない第六中隊へ下士官を増員

なさるとう負傷兵中をしてくだ

自分は、毎日米攻する敵の進も将校は戦死し、下士官が中隊長の任務についていた。兵隊の数も少なく、ある中隊では残る者五人、多くても二十人とはいなかった。

田中喜夫は大隊本部左横約三

十尺の陣地へ敵情視察のため進

んだ。身辺で手りゅう弾がサク

裂する。そのなかをはって第二

機関銃中隊のコウへはいった。

青い野戦出身の中隊長佐藤長

太郎中尉がいた。

「おい、田中。本部はいつまで

ている命はなかった。あなた

からの返信をもって帰ってき

さい」

激烈な戦闘中、感傷にひたっ

せた。やがて伝令は、寺岡軍曹

と書き、伝令に渡たせて走ら

なさるとう負傷兵中をしてくだ

百十五人になってしまった。敵陣、戦闘の慣例のとおりとく

に三方所も負傷し、戦闘指揮が

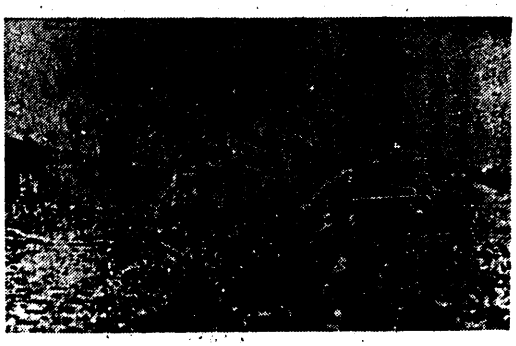
とれない。

田中喜夫は通信紙に大本部から下士官一人を派遣、第七中隊の指揮をとらせるから、寺岡は大隊本部のコウに後退せよ」

と書き、伝令に渡たせて走ら

いない第六中隊へ下士官を増員

なさるとう負傷兵中をしてくだ



米軍戦車もまた敵の特攻隊・肉薄攻撃班にやられた

今夜、俺は下生き残りの八人で一緒寝っている。ゆっくり寝ゆっくりおけて待ち、敵地対戦の敵の戦車指揮所に迫撃砲陣地へ切り込みをかける。大隊長に伝令明朝まで電話するぞ」

一部要約

（山形三四七五部隊下・真・記）

七師団戦記

あゝ沖縄

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

<197>

あとの事は頼んだぞ……

形見を残して戦死

平野大隊長は

『本部が中隊よりさきにつぶれては駄目ならん。いかに敵の砲弾がはげしくとも、かならず目を出せ。カタツムリになったら敵の思うつぼ、馬のり攻撃をうけ全滅だぞ』

大隊長にいわれるまでもなく、この戦闘は我知らの戦闘以来、全員が背水にしみている。

田中曹長と川口副官は連日交代で山頂にのぼり、各中隊の戦闘状況、左右の友軍陣地の状態を見聞っていた。

第一大隊の陣地は、一五〇高地の小禄北大射撃場の第一大隊が陣取っていたにあった。

第一大隊は五月十日ごろ、戦闘力を失って、第二大隊の右後方一五〇高地に後退、兵力は一個小隊にみたない大隊になっていた。

この第一大隊が守備する一五〇高地を陣地にとられると、第二機関銃の銃口は、本部陣地の大隊正面と直接に敵をうけることになる。しかも、一五〇高地は第一大隊の陣地（一四〇高地）より十尺ほど高く、距離は三百尺とはなれていない。第一大隊に絶対守ってほしいところだった。

十五日早朝一時ごろ、田中曹長は川口准尉と監視交代の一ぬ、高地頂上の直撃関銃陣地のコウ内へ交通ゴウをのばっていった。

壁をのぼすと、左二百尺の地点に第七中隊の陣地が見え、その正面へ敵戦車と歩兵が接近、七中隊の監視兵は敵歩兵に三方からねらわれていた。曹長は敵の歩兵を撃とうと小銃をかまえた。だが、よく見ると敵戦車の〇高地を陣地にとられると、第二機関銃の銃口は、本部陣地のこちらに向けられている。察しては、たちまち撃たれる。見つまるようなそこへ、川口准尉がおりてきた。

『准尉殿、あぶないっ』

交通ゴウのなかはせまい。

××　××

日がくれ、戦闘がやんだ。川口准尉は平野大隊長のそばに横たわっていた。准尉は近づく曹長に細い声で

『田中、あとをたのむぞ…』

といい、スボンのポケットのあたりを手さぐりする。パンドからくさりで大形の懐中時計をつるし、ポケットにいれていた曹長は時計をはずした。すでに本部員の時計は、准尉のこの時計以外、用をなさなくなっていた。

曹長は時計をはずした。すでに

『かたみだ。田中、あとをよろしくな…』

ふたりともやられる—

曹長は川口准尉の近づくのをとめようとした。

『もっとおくってください…頭をひくく…』

准尉はすぐか近づき、曹長の右側へにじりでた。そのとたん「ウ、ウッ…」とうなり、腹へしまったヒノやられた…〉

准尉を倒したソ連弾は、右後左三百尺の一五〇高地頂上から飛んできたものだった。

〈一五〇高地頂上で、きのう准尉弾を補給兵の担架で新川の野戦病院へ後送された。

夜がふけてゆくにつれ、後送できない負傷兵のうめき声が、よく朝、川口准尉は手中で絶命し、弾薬庫前に埋葬した—と曹長の屋敷に川口夫人、お子ちゃんのおもかげがうかんだ。

〈准尉殿は、助からぬかもしれない。満州西面戦の復合で、ゴウ内にたまる。

は、よく夕食をいただいたものだったが…〉

時はまる沖縄戦没者慰霊祭は聖火リレーを予期もしていなかったろう。

の冥福をつけた。

写真　山部三四七五部隊下風一郎曹長供ハルさん（札幌市・聖心）

懐中時計

七師団戦記

あゝ沖縄

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

敵の死体

交通ゴウに四十体

敷きうめたように…

川口副官を失ってからの平野少佐は、力を落とし疲れがめだつようになった。第一線進出以来四十余日その間、睡眠時間は毎日二時間半くらいしかとっていない。心身ともにおとろえるのは、ひとりあるかった。

一日の戦闘が終わり、大隊長として夜間なすべき処置をすませて攻撃するのが午前四時か五時ごろ

「あすは、この陣地も、もうたもてまいなあ…」

顔色になって平野少佐がつぶやく。その声をきくと田中曹長は、なにくそーというが持ちになる。

「大隊長殿、死力をつくしてまた、あすの晩をかがえて見せます」

そのことばどおり、曹長は、よく朝七時になると、人員、弾材、糧食をかりあつめて一日中戦いつづけた。

大隊長も横にはなっているが仮眠程度のねむりしかとっていない。起きあがって思い出したことを命令したり、やってくるさかい、わが大隊の戦闘状況がわかるこの伝課に、ひとり四発ずつの手りゅう弾を分配した。彼らは交通ゴウに伏して、敵の接近するのを待った。

すると平野少佐が

「なに、まだだい、じょうぶだ。後方の砲兵も司令部も、まだ、ものすごい。」

「いまだッ、投げろ！」

曹長の号令。約十人の兵隊は毎夜、七時までのうちに二、三回は起きあがった。

平野大隊長を元気づける出中曹長もまた、不死身ではない。

やっぱり、ふたりのうち、どちらかが倒れてくる。戦闘意欲を失いかける。さきに戦死した戦友たちがうらやましく思われる夜がある。曹長は、生き残った戦友たちに話しかける。

「ゴウ内は負傷者でうまっているが、衛生兵もいないし、後送する手段もない。もう、心ゆくまで戦った。あすは大隊長殿とともに、この陣地で玉砕しよからんわけはない。なんとかして援護してくれるだろう。がんばるぞ」

ふたりのうち、どちらかが気をだして敵戦をつづけていた。

五月二十二日―十数台の敵戦車は、各中隊陣地のあいだを抵抗もなく進んできて一四〇高地のふもとにとまった。戦車につづいてきた多数の敵歩兵は、大隊本部ゴウへのぼってきた。

「馬の口攻撃だ！」

田中曹長は山口にいた十人ほどの兵隊を集めて、敵の頭上へ手りゅう弾を投げつづけた。

〈うまくいったッ〉

のびあがってみた。血だらけの敵兵が一人、一五〇高地への道を死にものぐるいで駆けおりてゆく

〈あいつを逃がしてはたいへんだ。向こうの敵陣から攻撃をうける〉

曹長はピストルを発射しめ、いっせんにあとを追った。交通ゴウのなかには、敵兵が敷きつめられたようにたおれていた。そのうえを踏んで走る。グニャッとした肉を踏む足ざわり。

〈はたして、みんな死んでいるのだろうか？〉

足音や話し声が近づく。曹長はそっと頭をあげて敵情を見た。前方十数のくぼ地に、約五十人の敵歩兵。全員自動小銃やかまえ、まさに、こちらの陣地へおそい込まん姿勢！

〈全員が死んではいないはずだ。死んだふりをしている者も、このなかには、かなりずいぶんいるだろう〉

走りながら、不安が胸にわく。敵の戦死体は三、四十体。

米軍がこぶを抱負から負傷兵の戦場の敵兵八重瀬岳

〈もしも、このなかに生きている者いたら……この倒れた敵兵のなかに、目をあけ、身をかくしていて、いま、自分を撃ったら……〉

曹長は、散乱する敵兵の死体を見回し、急におそろしくなった。

〈敵兵の死体をかきわけた。やっぱりこの場所へひきかえした。でもこの場所へひきかえした。

一郎 山口三四七五番地一風呂屋さの横ハルさん（札幌市）

曹長は、散乱する敵兵の死体を踏みつけて逃げてゆく敵兵を追うのをやめ、ただ敵の死体を踏みつけ

七師団戦記

あ、沖縄

<199>

戦没一万八千五柱の霊にささぐ

地獄の季節

140高地の争奪

一帯しかばねの山

陣地へもどった田中曹長を、兵隊たち味方そうにむかえた。

「どうしたんです？曹長殿！」

指揮班の兵隊は、とがめるような口調。

「残念ながら、ひとり残りしてしまった。…あの敵兵の迫撃で、あすは一五〇高地から総攻撃をくうぞ」

曹長の行動の経緯を知った兵隊たちは、急に不安がり

「今夜、きっと敵は、負傷者や死体の収容にきます。そのまえに、見えている者を全部やっつけましょう」

これを平野大隊長がとめた。

「そうまもしなくてもいいだろう。すでにしばらくたっては、敵も味方もない。生きていても相当の重傷だ。あすは、自分たちもあのとおりになると思え。敵がこの高地を奪ったら、左翼の一〇〇高

七師団戦記

あゝ沖縄

<200>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

土砂で入り口埋まる

あつさに苦しめられる

呼吸困難

五月二十三日午前四時、敵歩兵は一四〇高地に現のり、後方の一五〇高地からは戦車が攻めてきた。

大きな入り口には、平野大隊長と竹内曹長、小さな入り口には、田中曹長と兵ふたりが守備隊長についた。曹長は入り口の前に土を積みあげ、そのうえに土をいれた弾薬箱を二ならべた。箱と箱のあいだを三尺ほどあけ、小銃と銃で偽装した。

敵戦車が左から右へ、キャタピラの音をとろかせて迫ってくる。曹長は弾薬箱のあいだから見て一台、二台と数えた。

大隊長の守備する入り口は、前の通り十五米、敵戦車を見ることができない。曹長は隊長をつって戦車の数を報告していた。

四台目の戦車が、曹長のいる入り口不意に停止した。距離は十五米くらい。砲塔を右へまわし、入り口に向けた。

〈あっ、撃たれる！〉

息がとまる。心臓がドキドキ…と大きく脈をうつ。大きく開いた砲口が怪獣の口のよう。長いあいだ、曹長はじっと待っていた。

〈戦車が攻めてきた。こうしてはいられない。ただかおう、ただかおう…〉

からだをうごかそうとした。動くようでもあり、全然うごかないようにも感じられる。

〈これは、ロウソクの赤い火だ。顔に当ったり、左右に動いたりする。俺は、まだ死んでいないらしい…〉

曹長は「うう…」とうなった。

感覚がすっかり回復したとき、上に厚く土がかぶせられていた。敵戦車は曹長がカンブルを十本以上もうってよみがえらせたことを知った。

曹長のいたコウの入り口は、地質が軟く、戦車砲弾の一発目が、入り口の約一尺うえでサク裂。曹長は土砂がくずれて埋まった。敵戦車は、つづけさまに二、三発撃ったため、曹長の全身は土の下に埋まったが、高田伍長らが力をあわせて掘り出した。

曹長は頭、肩、腕などに五カ所、砲弾の破片をうけていた。その手当てをうけ、重傷をおのえて戦列に加わった。

平野大隊長の守備する入り口へ行く。直径二尺もあった入り口は、砲弾でさかれ、二十センチほの小さな穴に変わっていた。

その穴から、夕ぐれの弱い光線がコウ内にさしこんでいる。

こと以外の穴をさかれたため、コウ内は二十五度を保ち、全員あつさと呼吸困難に苦しむ。

ひとりの負傷兵の手にぬれた布に、弱い外光が光っていた。彼は、あえぎながら動かすことのできる右手に手りゅう弾をにぎり、自殺しようとした。ただ、だった。

やく平野少佐がつけ、手りゅう弾をとり捨てた。

「あと一時間のしんぼうだ。一郎曹長の母ハルさん。（札幌市・婦人）

そとがくらくなれば、この穴をひらいて、全員が新しい外気を吸いこめるのだ。がんばろうぞ」

あえぎながら、このことばを大隊長は、自分自身にいいきかせているようだった。自分が弱気になるのをふせいでいるようだった。

空気と太陽とみどりの島・沖縄だったが…

親子　山盛三四七五高等学校・真一郎曹長の母ハルさん（札幌市・婦人）

七師団戦記

あゝ沖縄

<201>

戦没一万八十五柱の雲にささぐ

死ぬなよ

きっと本部へ戻れ……

顔は血と土にまみれる

〈大隊長も苦しそうだが、俺も、こんな苦しいのにはあったことがない、いままでで一番くるしい……〉

田中軍長は、目の前が、だんだんくらくなってゆくのを感じた。港にたどりつえなくなった。眼いとむ気が、傷口からの痛みか、炎のように熱い。

入り口のそとから喜劇の声がする。大勢の兵隊がいるらしい。思きたえるその音には、平野少佐の止めるのもきかず、ちょっとでも、小さい穴に変わった入り口へ近まろうと、せまい坑道を入り口のほうへとのぼる。

〈このままではみんな、あと何分も生きられない。よし、やれるだけやろう〉

田中軍長は決心した。

「まて、俺が穴の口をひらき、そこの隙間を通り、十五人ほどの名中隊の兵隊が、本部ゴウの入り口たまりを、どんどん裏の谷間へのっそり落とした。負傷兵たちはかたいおにぎりを食いたい一心から痛さも、苦しさも忘れ、次から次へと右手に銃を握り、ある者は右手に銃を握り、ある者は、ゴウの入り口へ片手をのばし、ことごとく絶命していた。

× × × ×

川口准尉殉死の報中隊が午後九時数分を示していた。田中軍長は、ゴウ内にあった手りゅう弾を十発ほど持ち、はってゴウを出た。

二十メートルほどくると左のほうに軍長のかげが見えた。軍長は、彼らは、大隊本部ゴウの危機を救うつもりで突撃してきたのか、ある者は右手に銃を握り、ある者は、ゴウの入り口へ片手をのばし、ことごとく絶命していた。

× × × ×

川口准尉殉死の報中隊が午後九時数分を示していた。田中軍長は、ゴウ内にあった手りゅう弾を十発ほど持ち、はってゴウを出た。

二十メートルほどくると左のほうに軍長のかげが見えた。軍長は、

〈軍長も同じ考えをおしと言っていた。軍長は、きょう一日の戦闘で敵力所に負傷し、動じかたくなった戦友の死体を左手につみかさねたとを作った。

〈ゆるしてくれ戦友よ。あの苦しい戦いをつづけ、倒れたのちまで、乗っとになるのはいやだろう。しかし、これも任務のためだ。ゆるしてくれ…〉

軍長はふたたび、ゴウへもどった。平野少佐に片銃軍曹と当番兵をつけ、戦友の死体のかげをはわせて、下のくぼ地へ送り出すことに成功した。

その間軍長は、敵が撃ってきたらーと、手りゅう弾の安全ピンを抜き、四発にかたく握って敵の方向をにらんでいたが、敵はどの瞬間に突っかかった。

平野少佐は、軍長との別れにさいし、その大んな意に感謝するとともに

〈田中、死ぬなよ。かならず後から脱出し兵ガ丘の部隊本部へこいよ。かならず来いよ〉

同じく同じくもをおしと言っていた。軍長は、きょう一日の戦闘で敵力所に負傷し、動じかゆう血と土にまみれていた。彼は、

〈人間は神ではない。何倍それを耐えしても、毒殺しても、良心的死をしなければならぬ〉ゴウの苦しみからはのがれられなかった。

〈いま、撮影している部隊現地も数の遺骨には墓とあった〉

部隊衛生軍長が、重傷者の処置にあたっていた。右手に負傷し、動じかぬ

撮影　山路二四七部隊写真部

ぴ出した。

一部軍長の姿ハルさん（沖縄用・詳細）

七師団戦記

あゝ沖縄

<202>

戦没一万八千五百柱の霊にささげ。

田川大隊長

馬のり攻撃に苦戦

最後の一兵まで失う

△各中隊平時をうけた工兵隊員中隊に、もう生存者はいないだろうか？〉

田中曹長は、それらを弁ガ岳の部隊本部に集結させ平時の任務にいれる責任を感じた。敵の攻撃をうけ、負傷しながらも陣地をたしかめて歩いた。

回り歩いて、大隊本部のこちへもどったのは、午前零時ごろだった。

こちのなかに曹長部隊、通信部隊を放置したまま、それを始末した。

△ここに置残って死ぬべきか？それとも脱出すべきか？〉

考っていると、こちへ接近してくる敵人の足音――

△敵だな？――この真夜中に――馬鹿なやつらだ〉

手ごわい敵の安全せんを知らく近づくのを待つ――

やってきたのは、部隊本部の通信中隊の見習士官以下十人。

通信隊は、吉田部隊長の命令で曹長を迎えにきたという。

「あすから通信は、弁ガ岳で最後の陣地配備につきます。地形地物をよく知っている田中曹長が必要だから、いっしょに来てあっても、かなりの情報させ十とのことでした」曹長は軍から腰にかけ、二十三カ所の負傷、耳も目もよくきかない。

「曹長殿ッ！田中曹長殿ッ――よせ、聞こえていた古刀」

△友軍だ！バカ野郎！敵にとりまかれているのに、大きな声を出しやがって…〉

△さては、札幌の実家からとり「正宗」を、軍刀より長いから持ってゆけ――と、後退する竹兵軍曹に持たせたのを、部隊長や

「正宗」を、軍刀より長いから持ってゆけ――と、後退する竹兵軍曹に持たせたのを、部隊長や

大隊長が、田中は死ぬつもりと判断したな？〉

隊の攻撃をうけながら、陣地を確保しようと死闘している敵を思うと、じっとしてはおられなかった。

△おれはバカだ。これだけやられても、まだとりず、後退してまた戦うつもりなんだ〉

通信隊の兵隊に手をひかれ、こうそうでながら曹長は自分を笑った。五月二十四日午前三時だった。田川少佐は、まだ第一（戦闘）

ながら、左側面の敵と交戦していた。

やがて負傷した田川大隊長が当番兵と敵中をくぐりぬけ、一四〇高地石垣に到着したのを田中曹長が認め、伝令を走らせた。

△わが第二大隊本部こちへおいでください〉

田川大隊長は、高地石垣の兵の負傷者集合のこちら内にいた。田川少佐は、まだ第一（戦闘）

はあの陣地で指揮下各中隊を最後の一兵まで失ってしまった。

おれは、人員の補充をうけ、さらに新鮮な戦闘を続けるにたえ

ない。

大隊が、一五〇高地に進出しないうちに負傷した自分を恥じ

「おれが悪いのか、それとも敵の火力がまさりすぎるのか。おれ

ここで敵の一人でも倒し、おれの大隊の最後としたい。平所少佐の「闘魂を祈る」

と言え、遂に第二大隊の陣地

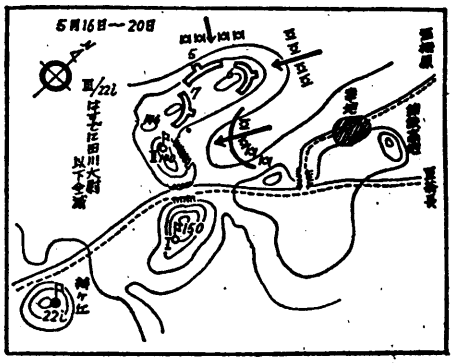
った。

× ×

このころ第三（田川）大隊の戦闘を田中曹長はつぎのように書いている。

第三大隊は一四〇高地（第二大隊陣地）の右前方・野戦重砲陣地にいた。

田中曹長も第二大隊員は、監視所のこちらから左側面に、この田川大隊本部が、敵の馬のり攻撃をうけ、苦戦しているのを見



図は田中敏太郎さんのかいた戦闘図

取材 山田三四七五部隊下真一郎曹長の弟ヘルさん（札幌市・警察）

あゝ沖縄

戦没二万八十五柱の霊にささぐ

あるく

上半身は傷だらけ

一本のツエがたより

田中軍は、ゴウの入口から外へ二百メートルほどはいってた。そこから百メートルも行けば、山頂の敵軍からは死角になっていた。

敵の通信兵員らは、すでに五十メートルも先行していた。突然、当番兵がもりゆう軍サク戦。軍長は頭から百度にかけて蒸発。サッと振えあがった次が、からだをつんだ。

〈敵ノ／ガソリンをまいた〉

軍長は二回の炎のなかを、とうしてくぐりぬけた次、自分でもわからなかった。

先発した通信員ら四、五人のいるくぼ地へ軍中でとりけとんだ。最初十名ほど二、三人は、そこからさらに先行していた。軍長ら、六人はすぐ敵の次手に接近をとった。

〈敵が来ってきたら、生きぬ〉

が苦しまぎれに反撃してきた。

〈敵ノ／ガソリンをまいて、手りゆう弾を投げ下ればいいんだ〉

軍長は二回の炎のなかを、とうしてくぐりぬけた次、自分でもわからなかった。

先発した通信員ら四、五人のいるくぼ地へ軍中でとりけとんだ。最初十名ほど二、三人は、そこからさらに先行していた。

軍長ら、六人はすぐ敵の次手に接近をとった。

〈敵が来ってきたら、生きぬ〉

と叫べ、ガソリンをまいて、手りゆう弾を投げ下ればいいんだ〉

田中軍長は、そう思った。同軍は炎のままもえあっていたそのまま敵の攻撃がない。軍長は敵がたってきた。

この通信員のやつら、敵出なとて、いらんやるもやく、敵前

そのまま敵の攻撃がない。軍長は敵がたってきた。

この通信員のやつら、敵出なとて、いらんやるもやく、敵前

歩く一歩から上にこそ負傷していたが、下のほうは無傷。なんでもなさそうなことだった。

だが、きょう二十三日の朝から一口の食糧もとっていない。四肢の視力は、歩兵砲、手りゆう弾、ガソリンの炎にやかれ、既別等さえぼんやりぼやけて見える。耳も、よくきこえない。

さらに、左前腕の負傷箇所

歩く一歩から上にこそ負傷していたが、下のほうは無傷。なんでもなさそうなことだった。

だが、きょう二十三日の朝から一口の食糧もとっていない。四肢の視力は、歩兵砲、手りゆう弾、ガソリンの炎にやかれ、既別等さえぼんやりぼやけて見える。耳も、よくきこえない。

さらに、左前腕の負傷箇所

でさが、十分・十五分・疲れていたが、下のほうは無傷。なんでもなさそうなことだった。

だが、きょう二十三日の朝から一口の食糧もとっていない。四肢の視力は、歩兵砲、手りゆう弾、ガソリンの炎にやかれ、既別等さえぼんやりぼやけて見

〈このまま、どろどろ死んでゆくのか〉

歩兵をたたかいぬいてきたことを思うと、いたにもみじめで残念だった。手力をつくしてはいまわり、やっとうえをつかむ。

〈うえをたたかに二日がかり…か〉

どろ田からあがって間い、しっかりした地面を踏む。スル・ッ

[redacted]

軍は、ガソリンをまいて火を放った。

七師団戦記

あゝ沖縄

<204>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

部隊長と大隊長

残りの「カンパン」

負傷の下士官の胸に

田中曹長は、全力をつくして穴からはいあがった。身うごきできないほどの疲れ―足腰を立てにしたのは、しばらくたって、疲労が回復してからだった。

よく見えないが日本兵らしい―と直感し、声をかけた。相手は独立混成第四旅団の監視兵であった。曹長は兵二十二連隊の最後のひとりとして以外、あいていなかったのであ

「戦車の攻撃は、すごかったでしょう」

監視兵は同情をよせ、弁ガ岳の部隊本部まで約五百㍍ほど手をひいて誘導してくれた。

曹長は全身、どろと血にまみれ、太腿についたが、だれも田中、死なんぞ、部隊が全滅す

中曹長と見わけられなかった。その負傷したからだを炊事場の米をいれた麻袋のうえに横たえた。本部のゴウはせまく、そこ

長は感激した。

五月二十五日、弁ガ岳陣地で米軍の南下を防ぐ戦闘を行なうことになった。弁ガ岳村沿は、

田中曹長に

『部隊は二、三日ここを撤収し、わが軍の最前線陣地を偵察するよう命令をうけた。今夜

命令を復唱し弁ガ岳に帰った

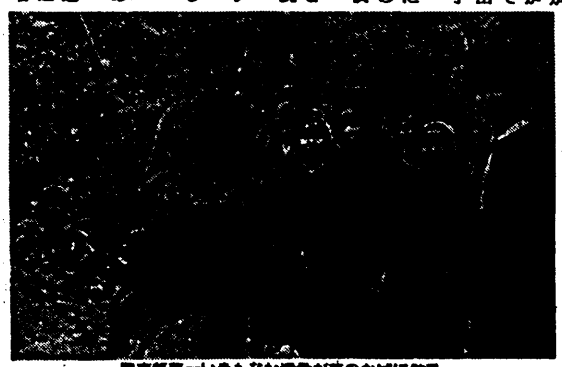
平野少佐に見つけられ、国吉へ後送するようかさねて命令された。

負傷で立ちあがれない田中曹長に、戦友とはいえ、見もしらぬ下士官や兵隊が、いそがしい時間をさいて、サンで飯をくわせてくれていた。曹長は戦闘員に

平野少佐は、残りすくないカンパン四食分を田中曹長の胸につるした。四時と言葉剣をうけているので、無のうに入れたのでは食べれない―と少佐は考えたのだ。

「大隊長殿、それでは国で待っています。かならず、元気で戻ってきがって きてください」

曹長は腰をロープで内務班員にしばり、西国ゴクのお遍路さんのように、カンパンの袋をあなの下につるしていた。平野少佐に見送られて戻へ後送したが、これが少佐との永遠の離別となった。



国吉部落―いまもなお遺骨が草のかげに散乱している。

七師団戦記

あゝ沖縄

<205>

戦没一万八千五百の霊にささぐ

富士（あやめ）正義さん（三重三百町本橋）は、平野大隊の指揮所隊の伍長だったが、同大隊が六月十七日まで奮闘できたのは兵器係瀬井伍長（故人に生存）の勇敢な活躍によるものであるーとのべている。

五月二十八日、日本軍司令部は南部のなかを首里から南部へ後退した。軍司令部、師団司令部、各部隊とつづき、歩兵第二十二連隊（山三百七四部隊）は各隊の後尾、その殿軍が平野大隊だった。

出発は午前零時。あやめ伍長ら三人は、二時間あとの午前二時出発せよーと命令をうけた。車輌は全部おいてゆくことにきまる。

午前零時定刻に平野少佐が四五人の兵隊をつれて出発した。残ったのは、あやめ伍長、斎藤軍曹（静岡から応召）で、ほかに、力つきたのびろ（三重）、手をとりあってよろこび、やめ伍長らは、うまいうまいと言っていた）寺田兵長ほかひとりの四人。ひとやすみしようーとの四人は道端のなかで横になり、ねむった。

斎藤軍曹しおこされ、小銃一丁は寺田兵長、手りゅう弾七発を

白骨の行列

一瞬、立ちつくす

道路の両側にびっしり

もらけてもら、敵にあったら手りゅう弾を全部投げ、首脳カリで自決しようーと話しあう。

出発しようーと話しあう。

さきに戦死した竹浜軍曹ら三、四人の戦友に無言の別れをつけ、食糧として、畑から小さなサツマイモを三四つひろってポケットにいれる。

敵の目をさけて後退し、軍司令部経理部のゴウにつく。夫が月にてらされ、死臭はそれほどしない。

あやめ伍長は、鬼をのんだ。（病院ゴウから出て、馬乳へ

い、ここから南下、後退をはじめる。

黒明軍は散発的にしかあがらない。斎藤軍曹が地形、道路をよく知っていた。案内されて東風平部落へつく。

山のなかに野戦病院のゴウがあるときき、のぼり口まで進んで、ギクッと足をとめた。

あたり一面の白骨、民家の石垣や立木によりかかっている白骨もあれば、草のなかにねているのも白骨。東風平から真壁部落へつながる道路の両側が、びっしり、声のない白骨の行列。

大隊砲小隊長、武藤少尉（函館）本田曹長、機関銃中隊の片足を失った曹長らであった。一

後退の途中、力つきたのびろ君、このゴウには、めずらしく米うー。地獄というものが、この世にあるとすれば、こういう光景だろう）

伍長らは、死の世界を駆けぬける思いで南下し、野戦重砲の陣地あとへついた。ゴウのなかに平野大隊長が立って、四人を出迎えてくれた。

その夜はゴウ内であかした。

つぎの日の午後、伍長は鉄軍のキャタピラの音を耳にした。山へのぼってみると、青風平部落にブルドーザーが五台、道路上の白骨を処理していた。

（勝ち戦だったら、神や仏にまつられるのに、ブルでゴミのように清掃されるとは…）

無念さに涙のでる思いだった。

野砲のゴウから兼川へゆく道路のゴウへ移った。そこに、二度と会えるとは思わなかった戦友たちがいた。

あやめ伍長は、鬼をのんだ。

（病院ゴウから出て、馬乳へ

どこの戦場もいっぱいになっている

―豊見城の名護之塔で―

後も飛んでこない。

玄米がめしをたく。おかずは白砂糖。宇栄田を出撃して以来、はじめての米のめしだ。あ

原宇　山三二四七五部隊下真一郎軍曹の長ムルさん（札幌市）

このゴウには、めずらしく米二袋、白砂糖三袋があった。そのうえ敵の遺棄部隊もなく食糧にした。

しば、あすにそなえて精りめしたらすくたべた。残った玄米めにした。

・軍部）

七師団戦記

あゝ沖縄

<206>

戦没一万八千五柱の霊にささぐ

寺田兵長

ソ撃弾うけて即死

突然水捜しに出かけ

あやめ伍長ら四人は、二日間、このゴワにいた。情報がはいり、まえにいた歩兵第三四の陣地には敵が進入し、陣地をつくっているーという。すぐ、陣地奪回の命令。動けない者は、真壁の大きなゴワへ移した。歩ける者は死になるのを待ち、宇江城のゴワへ移動した。ゴワ内に川が流れており、水には不便ないが、ゴワの入口があまりにも低すぎる。これでは馬のり攻撃をうけた場合、よけようがないーと心配していたが、よく敵、山ぞいに時々撃ちこんできた。

米兵が斜面付近戦車に歩兵が四、五十人。山すそを米兵が進で六、七百人ほども続きはらっている。

伍長ら四人は、小銃弾五発、手りゅう弾十数発しかもっていない。敵をできるだけ近づけ、一気にこれらの兵隊を使い、岩づたいに斜面上の竹やぶに逃げこむ作戦を決めた。

米兵たちは、警戒するようすもなく、くわえタバコでやってきた。三十メートルほど接近したとき、寺田兵長が小銃発射、三人はいっせいに手りゅう弾を投げた。不意をつかれた米兵はあわてて二十メートルほど後退した。

米兵たちは四人を発見できぬらしく、やくら撃ちに撃っている。そのあいだに、四人は、岩かげづたいに古墳家の竹やぶへはいり、豚小屋へかくれた。

くは地の豚小屋は、鉄製な太鼓から外へはって出て行った。じり焼かれるような暑さだ。

一発にこのゴワ内の米兵が、のどがかわく。水がのみたい。だが、敵と戦う武器ひとつなしでは、どうにもならない。竹やぶの外側、三メートほどのところを、つぎからつぎへと米兵が通る。四人は息をつめ、じっとかくれている。ほかはなかった。

人はやく夜になればいい…ソ祈るような気持ちーかれた竹の葉をしゃぶる。いっそうのどがかわく。

やがて太陽が西の空にかたむきはじめた。

もう一息のしんぼうだ〉

その時、急に寺田兵長が豚小屋から外へはって出て行った。とめるまもなかった。

ほどの米兵が、道路を沖縄住民と並行して歩いてゆく。米兵は住民に危害をくわえるようすもなく、子供が泣くと笑べ動かなにかをやっている。その光景を見ながら

〈これでいいのだ。日本軍と行動をともにしたところで、いまさらどうなるものでもない…〉

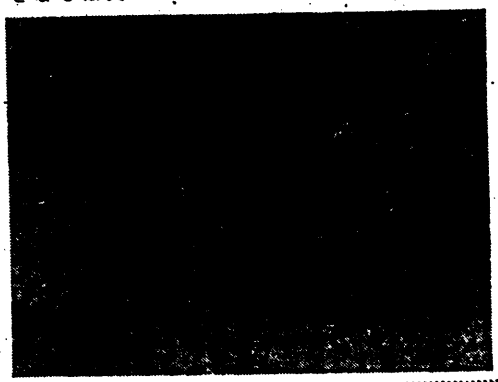
あやめ伍長はそう思った。日が沈み、暗くらくなっても、住民の行列はつづいていた。

伍長ら三人は豚小屋を出た。水をのむため竹藪へはいろうとした。

「兵隊さん…」

ところとがれた。敵弾は三発はどはいる水ガメを出して、のみなさいーという。

あやめ伍長ら三人は、かわるがわる、カメがからになるまで



（真壁部落のつぼ入り口）

突然、くら中のなかから声をかけられた。住民が三人ー

「山のうえだ、まだ敵がいます」

伍長は礼をいい、水のあるところへ戻んだ。

講演　山田西七五歳下真一郎軍長の故ハルさん（札幌市・軍曹）

あゝ沖縄

<207>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

がんばってください

銃も持たぬ兵を励ます

死にいそぎしないでください

「こちらそうさん」

あやめ伍長は、生きかえった感動をこめ、礼をいう。

「兵隊さん、眼がへっているでしょう……」

三人の住民―そのひとりが黒砂糖をさしだした。

伍長らは心から住民の好意に感動し、黒砂糖をなめた。

そばの小さなゴウから母親と娘さんが出てきた。母親は助産婦だった。母親は助産婦

朝日二等をさしだし―

「兵隊さん、がんばってください…」

いう者も、いわれる者も、いきちとうにもならないことはわかりきっている。それでも―

伍長ら三人は、水筒のみ、黒砂糖をなめて胸いっぱい。そのうえタバコまでもらって幸福を感じた。

軍服を着ているとはいえ、小銃二丁もっていない敗残兵に、同胞として親切にしてくれる沖縄のひとびと―

「兵隊さん、がんばって…みなさん、決して悲観をおこしてなく住民と兵隊は別れた。

（あの時、生き残ることは思ってもいなかった。あの人たちに、いまお会いできるものなら、あってお礼がいいたいと、あやめさんは書いている）

三人は吉男して平野大隊長のいたゴウへついた。だれもいない。ここは一本ゴウだ。攻撃をかけられたら、ひとたまりもないだろう。

沖縄住民は、切実な思いをこめていう。兵隊たちもまた……

「ここは日本本土なのだ。日本はこのまま沖縄を見捨てるはずがない。かならず逆上陸してくる。それまでみなさんも、きっと生きのびていてください…」

名前をたずねることも、また

なのことも

なく住民と兵

隊は別れた。

（あの時、生

き残ることは思

ってもいなかっ

た。あの人

たちに、いま

お会いできる

ものなら、あ

ってお礼がい

いたいと、

あやめさんは

書いている）

三人は吉男

して平野大隊

長のいたゴウ

へついた。だ

れもいない。

ここは一本

ゴウだ。攻撃

をかけられた

ら、ひとたまりもないだろう。

にもかかわらず敵兵がひとつもない…彼等は、偵地歩哨をしたか、それとも、五百メートルほど後方の連隊本部のゴウへ後退したか？

三人は本部ゴウへむかう。途中、連隊本部の兵隊にあった。

吉田隊長は戦死（六月十八日）、いまそこに山田少尉が居って、

われらの切り込みを出発するとき、

ろだ。第三師団長は自決し、参謀長二十二連隊の参謀は戦死したという。（生存者は六月二十四日、第三師団長自決は六月二十日、いずれも、最後の山岳陣地となった真壁付近真壁村本部地下壕内で行なわれた。

被部隊のゴウ内でおなわれた。

中ゴウ月。やすまない月が、

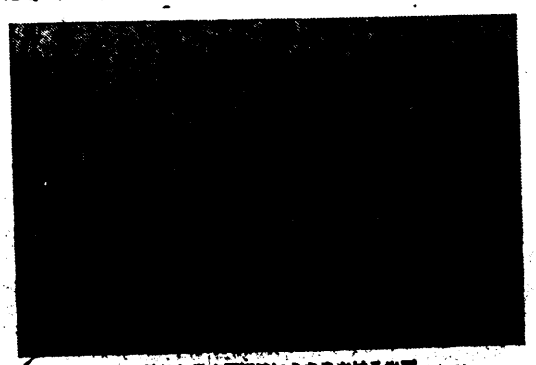
第十のひとたらしい光線、人間

間十の星のようなかいそ、つぶ

やいのように、微弱な光りを敵軍

になげかけていた。

軍手 山岳二中隊部隊下真一郎軍曹の兵（八人）（礼砲市



敗れた日本軍に激いうちをかける米軍

日、第三日、第三師団の第一線部隊は、二十一日、第三師団の第一線部隊は、二十一日、第三師団の第一線部隊は、二十一

七師団戦記

あゝ沖縄

<208>

戦没一万八千五柱の霊にささぐ

指揮官

自己保護むきだし

平時大名、砲火にくすむ

あやめ伝説らは、この切り込みに参加しなかった。手記に名田はないていないが、官職をもたなかったし、所属学員にする部隊にまじって戦闘することに安心感がもてなかったからではなかろうか？

別の手記には、軍隊内における矛盾、不公平、不合理がのべられてある。軍隊にたいし不信感をいだいたことも事実だ。

世じ不平感は多い。しかし、あやめ伝説のきびしい義務人物については田中絵太郎（軍曹（札幌師団出身））も言及している。彼ってあやめ伝説のつぎの手記には、たんなる不平、不満ではなく、当時の指揮官の欠陥をなに二回を記録するものとして価値のあるものと思う。

×× ××

（こんなことは、神縄記に書くべきではないでしょう。は飛びこんでくる。

将校、下士官のなかには、ゴウの奥で大小便をし、兵にかたづけさせている者がいた。因ったことに、これらの者たちは、

気違いのように「出れッ！出れッ！」とどなりつづけ、兵にとじこもったままだ。

平時は、兵に威れが悪い「軍人精神がたるんでいる」といばりちらしていた者が、この惨憺である。

敗色濃厚たる戦況下にあっていつのまにか雰囲気による指揮ではなくなり、社会的背景に制約し、これに対抗できる者が第二線のリーダーに推され、みんな

4戦車二台が近づき、五十米ほどのところから入り口に猛撃。彼の合計二人が、ゴウの奥から「ごめん、ごめッ！」と長をかな

た。遅しなっても、兵たちとあやめ伝説が、ふたりの将校の遺体に土をかけに行ってみると、からだじゅうにクマをうけたからだじゅうになっていた。ふたりは男

（写真説明の黒塗部分。この部分は、原稿の欠損のため）

わけで、入り口に出ました。

「こんなことでは、われわれは負ける。俺につづけッ！」

とうる前もなく、二人は敵軍一部隊の長ヘルメット（ヘルメット・筆者）

まるがは三日は、どうって前れ

今であった。が、兵は、だれもあとにつづかなかった。

筆者　山岸三郎七五歳陸軍兵

七師団戦記

あゝ沖縄 <209>

戦没一万八千五百柱の雲にささぐ

無名戦士

要領読まれた攻撃

将校の無策に散る

戦闘団から五十人、三十人とたびたび敗兵がやってきたが、その指揮官たちも死の恐怖にかられ、任務をまっとうしなかった。

平野大隊長や川口副官は、戦闘指揮をロケット砲をさかんに撃ってくるつづいて敵戦車が陣地の下〈進み、敵歩兵隊があとについて進撃してくる。

その距離は約六十㍍、敵はピストルと手りゅう弾を使って攻めてくる。日本兵は体力的に劣っているので三十㍍くらいしか、手りゅう弾を投げられないが、敵は、六十㍍くらい投げる。大事なことは、敵がいくら手りゅう弾を投げても、六十㍍から三十㍍の距離に接近するのをじっと待ち、攻撃をかけることだ〉

〈はじめ敵は、迫撃砲やロケット砲をさかんに撃ってくるつづいて敵戦車が陣地の下〈進み、敵歩兵隊があとについて進撃してくる。

平野大隊長や川口副官は、戦闘指揮をロケット砲をさかんに撃ってくる。

〈はじめ敵は、迫撃砲やロケット砲をさかんに撃ってくるつづいて敵戦車が陣地の下〈進み、敵歩兵隊があとについて進撃してくる。

その距離は約六十㍍、敵はピストルと手りゅう弾を使って攻めてくる。日本兵は体力的に劣っているので三十㍍くらいしか、手りゅう弾を投げられないが、敵は、六十㍍くらい投げる。大事なことは、敵がいくら手りゅう弾を投げても、六十㍍から三十㍍の距離に接近するのをじっと待ち、攻撃をかけることだ〉

〈はじめ敵は、迫撃砲やロケット砲をさかんに撃ってくるつづいて敵戦車が陣地の下〈進み、敵歩兵隊があとについて進撃してくる。

その距離は約六十㍍、敵はピストルと手りゅう弾を使って攻めてくる。日本兵は体力的に劣っているので三十㍍くらいしか、手りゅう弾を投げられないが、敵は、六十㍍くらい投げる。大事なことは、敵がいくら手りゅう弾を投げても、六十㍍から三十㍍の距離に接近するのをじっと待ち、攻撃をかけることだ〉

戦車上から大隊長や副官は、敵の攻撃方法と、それにたいする応戦の要領を教える。ところが指揮官たちは、敵が近づくと兵に号令を命じ、五十㍍まで近づくと撃ってくると、どの指揮官も刀をかざして立ち上がり

「突撃に前へッ！」

号令し、全員いっせいに散兵ゴウやタコツボから飛びだし十㍍とは走らないうちに全員やられてしまう。

米軍は、日本軍のこの一世紀前の戦闘要領を研究しつくしているので、手りゅう弾をあちこちに投げて散兵ゴウの日本兵に誘いかける。それを知らずに食料確保のためという名目で、突撃をこうつづけるから、何度やっても効果はあがらない。

前に述べた要領将校やこの直属の勇兵にはやり狂乱する将校、敵を知り、おのれを知り、いかに戦うべきかを考えない将校などのために、無意味に死地においやられて死んでいった兵がいかに多かったことか。大勢の無名戦士のことを思うと胸ぐるしくなる。

ひとくちに戦争の犠牲というが、事実は単純なことではなくまた、こんなことは、戦争の裏会社にかぎられたわけではない。

戦後、収容所にはいってから耳にしたことだが、壕民間列島の二つの島の戦争（少佐）は、食料確保のためという名目で、

兵隊にはサツマ芋の茎が八、九割、米一、二割のカユをたべさせ、自分はこちそうをたべ、酒とタバコにおぼれていた。

戦争にたいしては冒険性で、サツマ芋の茎を二枚はぎんガーという名目で一人の兵隊を銃殺した。また、島の住民に面会を強要し、島民のほとんどを死なせ、自分は戦後、米軍に降伏して生きのびた。

その後、戦闘をつかって切り込み隊の指揮官をのがれた者、ゴウを掘ってかくれている住民、スパイの疑いをかけて殺ってしまうこと、自分たちがはいるために逃げ出したもの。

なちべればきりのない悪霊のかずかずが「鉄の暴風」（沖縄人による沖縄戦記・沖縄タイムス社編）や「秘録・沖縄戦史」（山川泰邦著・沖縄グラフ社発行）などに具体的に書き残されている。

地獄に追いこまれた前線・人間が地獄の所業を演じたーいま思い出したくもない。

（[redacted]）

つぎに書く、小説の話と女学生の話は、ともに戦争のうずのなかにありながら、悪夢として忘れ去りたいことを、素直な記憶として、二十年前の悪夢を思い出さ夢として光明に照らされてはならないことを、はっきり区別されて、それぞれ独自のエピソードである。

（[redacted]）

[redacted]

[redacted]

[redacted]

七軍司戦記

あゝ沖縄

<210>

戦没一万八十五柱の雲にささぐ

日本軍の飛行機は、那覇飛出で、飛行士の命を矢うし、小銃の性能もよくなかった。その小銃をもって、一日五十発以上撃ちつづけたから、二日目発以上を撃ちつづけたから、二千発は撃った。暗いゴウ内で、油を銃口から流しこむだけの手入れ。分解掃除は一度もできなかった。

五月十日以降、敵の攻撃は以つくひまもないほどの激しさ。そのなかを女子挺身隊が命がけで九九式の新銃、一、三千丁と、小銃弾、箱、にぎりめしを運んできた。

全員、こおりしてよろこび。新しい小銃を手にすると、敵の砲撃音が、おそろしくなくなるからふしぎだ。前日から生サツマずを少なたべたきりなのにだれも、にぎりめしを食べようとしない。ちょうど子供が、ほしくてたまらないおもちゃを買ってもらったときのようだ。

重士に照明弾が五、六発ずつ撃ちガラ撃ちようとしたが出てこない。

「兵長ッ！この小銃は使えません！」

小銃・女学生

使用不能の銃に泣く

海で自決した乙女たち

小銃のコウカンが四角だ。タマつめをするときと、撃ちがちとなった撃ちようを外へつまんだすときににぎるコウカンは、まるいものとばかり思っていた。兵隊たちは、グラインダーをかけていない四角なコウカンで手をきった。

〈いま国内では、あれもたりない。これもないという戦況なるから小銃を持ちだし、いま運んできたタマを撃ってみる。コウカンをおこしても、やっぱり、撃きようが飛びでてこない。いろいろやってみたが撃きようはメチャキでもしてあるのか、焼きついていた。

〈食うかくわれるかの激戦のさいちゅう、こんな小銃やタマを送ってよこすとは、あきれてものがいえない〉

兵隊が眠立ちしそうになる。見ると、兵隊たちは九九式歩兵銃を、地面にたたきつけたり、踏み折ったりしていた。

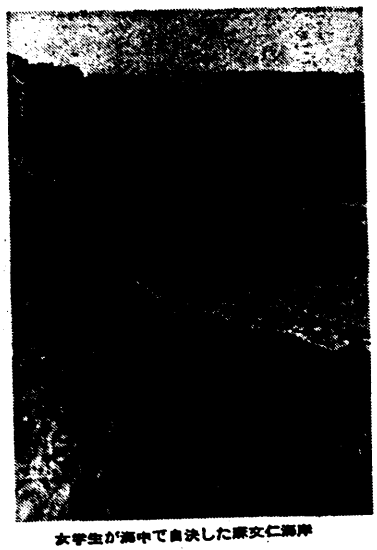
あやめ伍長は試射した自分の小銃を調べた。銃身がさけている。

ゴウ内から、使っていた古い小銃を持ちだし、いま運んできせんッ！」

苛をしているのだ。四角なコウカンもがまんしなければならない〉

あやめ伍長は、そう思った。

弟一反動が大きく肩の骨がくだけそう。コウカンをうこかし撃ちガラ撃きようをだそうとしたが出てこない。



女学生が海中で自決した摩文仁海岸

いま飛んでゆけるものなら、こんなものを作った工場の責任者、監督官の将校を、この小銃でなぐり殺してやりたいような怒りをおぼえた。

× ×

日本軍の敗勢が決定的となった六月二十四、五日ごろ、摩文仁の丘に聞した新聞は、軍人、重士から米軍の強襲艦に乗った日本兵が、さかんに降伏をよびかけていた。

夕日が空を真っ赤にいろどっていた。どこからともなく「子守歌の歌」。若き母親の子守歌の…。合唱がひびき、五人組と七人組の女学生が、それぞれ手をつなぎ、一列横隊のゆっくりした足どりで、崖ぶちはじめた海を、沖へ向かって進んでいった。

沖合い二百メートルくらいのところで二組は輪になり、美しいメロディーで投撃を合唱していた。海水は彼女たちの胸のへんまでひたしていた。歌い終え「天皇陛下万歳」をとなえた。同時に爆発音がひびいた。

少女たちの姿は海中に消えた。鬼のような少年兵たちの歌声―あやめ伍長は、この光景を生涯忘れることができない。

七師団戦記

あゝ沖縄

<211>

戦没一万八十五柱の霊にささぐ

迎えにくる

山三四七五部隊第二（本村）大隊主力の二千余人は、五月四日基幹隊の時、十数人しか残っていなかった一と無線電話さん（新川出身内町）は言っている。

大隊が死守する前田高地の一四六高地は、米軍に完全に包囲され、ゴウの入り口から爆雷を投げこまれる。これを投げ返すのがやっとの状態で過いはらうのが、精いっぱいの抵抗だった。

ゴウの内は負傷兵のうめき声でいっぱいになって大声でわめき、泣く。全部も水もない。重傷者をとっていないので、みんなさっさと、「日はかりヤロー」が口ぐちにいう。

「重傷兵は置き去り」

「動ける者がゴウを移る」

ゴウの入り口は爆雷で吹き飛ばされ、ゴウの中にかたまったらしい。

戦闘中、一睡もしていないが眠むいとは思わない。たべものより水がほしい。みんなラッパ呑みしている。ひとりで軍歌していた和田高等農業中隊の本内兵長（新内町）が戦死した夜（鳥二月末日は終夕（生活、高部本部へ（金武）すべしゃというあやそうせた。

ゴウの入り口は爆雷で吹き飛ばされて行ってくれ。と泣き叫ぶ。

負傷兵は新田三一等兵から水をあさせてもらい、河野上等兵と負傷した久保一等兵をゴウから連れだした。入り口付近は、五日間に渡いたとき、久保一等兵ら負傷兵全員は一度し死死体を足の踏み場もない。フワフワとやわらかい死体を踏みつけて歩いた。

近くの山上から第が爆雷で吹きとる。さて進むか、と

くさいと砂を踏むことに気がついた。見ると、水たまりのなかに死体がある。あわててはきたしたが、あとのまつり。

このゴウにもながくはおれない。久保一等兵ら負傷兵全員、負傷、河野はか二人が一組となって、沢地の水田地帯を延長部隊方向へひかい後退を開始した。

五十人ばっと集ったとき、爆雷が炸裂、ゴウの前面の山上から

ら爆雷が投げ込まれてきた。逃げ場がない。逃げろ、逃げろ、と叫ぶ。

「水をくれ」

「たのむから、いっしょに連れて行ってくれ！」

負傷者が泣きわめきながらとり付く。逃れてゆくことはできない。

ゴウの入り口は爆雷で吹き飛ばされ、ゴウの中にかたまったらしい。

戦闘中、一睡もしていないが眠むいとは思わない。たべものより水がほしい。みんなラッパ呑みしている。ひとりで軍歌していた和田高等農業中隊の本内兵長（新内町）が戦死した夜（鳥二月末日は終夕（生活、高部本部へ（金武）すべしゃというあやそうせた